



筑紫女学園大学リポジット

博多鋳物師深見家

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田鍋, 隆男, TANABE, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1049

博多鋳物師深見家

田 鍋 隆 男

博多の鋳物師深見家は、大田（あるいは太田、のち山鹿）、磯野、柴藤の各家とともに近世福岡藩の、そして近代福岡の鋳物業を支えてきた家である。深見家の祖先は南北朝および室町時代の守護大名である山名氏の祖といわれている山名義範の系統からでているという。山名義範は新田義重（源義国の子、新田一族の祖、一一三五―一二〇二）の長子で、上野国緑野郡山名郷（現・群馬県高崎市）に住み山名氏を称していた豪族である。ここから戦国期に深見五郎右衛門重畠がでている（『深見興禎墓誌』『福岡県誌 筑前之部』大道学館出版部発行 一九二九年）。

ほかの家についても見てみると、大田家は芦屋釜で有名な遠賀郡芦屋町山鹿出身の鋳物師で、十七世紀に博多あるいは姪浜に移住し（貝原益軒編『筑前国統風土記』一七〇九年完成）、のち金屋町（現・福岡市博多区下呉服町）で鋳物業を再開し、十八世紀後半頃に山鹿と改姓している（加藤一純編『治工山鹿氏系譜序』一七八三年）。磯野家は近江国から怡土郡高祖城（現・糸島市高祖）にきた磯野弾正兵衛員親の孫が十六世紀後半に博多に移住し、金屋小路（現・博多区上呉服町）に移つてのち土居町（現・博多区下川端町）に於いて鋳物業を営んでいる（『磯

野家系譜』）。柴藤家の祖先は柴田勝家の同族で、羽柴秀吉との覇権争いに敗れ筑前国姪浜に落ちのびたのち間達を恐れて柴藤と改姓し、十七世紀前半に西町下（現・博多区綱場町）に移つて鋳物業を始めている（津田元順・元貫編『石城志』一七六五年）。このように近世福岡藩の鋳物業を担った家はそれぞれの出自を伝えており、深見家もまたその例にもれていない。

近代に鋳物業に従事していた深見家には、拙稿「近代福岡の鋳物師」（『筑紫女学園大学 人間文化研究所年報』第二十九号 二〇一八年）で紹介したように、深見鉄工場（博多片土居町、現・博多区上川端町）や深見鋳物工場（博多下厨子町、現・博多区店屋町）、深見機械鋳物工場（大浜町、現・博多区石城町）などを経営していたそれぞれの深見家がある。この稿では上土居町深見家を中心に、以下『福岡縣碑誌 筑前之部』に掲載されている「深見興禎墓誌」をもとに、そして今日の深見家に伝来している『深見家先祖聖衆位』を参考に、人物を中心にして深見家の歴史をみていくことにする。なお『深見家先祖聖衆位』は太平洋戦争で焼失した過去帳を、深見家をよく知る某氏があらゆる資料をもとに復元し、それを妙行寺（浄土真宗東本願寺派、もと博多区上

川端町にあったが戦災で南区野間に移転、深見家と磯野家が交互に門徒総代をつとめてきた」の住職菊池景京師が清書したものという。

●深見五郎右衛門重畠（初代）

当初は深谷兵庫と名乗り信濃国高遠城主保科氏に仕え、のちに深見五郎右衛門重畠と改名している。慶長五年（一六〇〇）に戦国武将の保科弾正忠正直（一五四二～一六〇一）の息女栄媛（徳川家康の姪、黒田長政の死後は出家して大涼院と称した、一五八五～一六三五）が福岡藩主黒田長政（一五六八～一六二三）に嫁ぐとき、息女に従って来福、黒田家の家臣となった。長政夫人が元和元年（一六一五）の大坂夏の陣のとき人質として江戸に下ったときも重畠は同行しているが、大涼院の死によって筑前にもどったと思われる。『元禄分限帳』を見ると、深見五郎右衛門の禄は四〇〇石となっており、高い禄を得ていた武士であった。しかし承応三年（一六五四）二月十二日に二代

藩主黒田忠之（一六〇二～五四）の薨去により、翌十三日にこれに殉じている。享年六十三歳。法号は實相院殿一如空心禪定門である。墓はJR博多駅近くの東長寺（真言宗）にある、黒田忠之の墓（福岡市指定史跡福岡藩主黒田家墓所）前に並ぶ五基の五輪塔のうちのひとつ、向って左の最前列である。高さ二メートル余の花崗岩製の五輪塔であるが、その表面に彫られた文字は、梵字以外の細い



深見五郎右衛門重畠墓（東長寺）



墓碑銘「重畠」

（『深見家の歴史』より）
（深見達之氏提供 「畠」の〇印
は深見氏による）

文字は風化していて読み難い。昭和四年（一九二九）に出版された『福岡縣碑誌 筑前之部』には「深見五郎右衛門重畠」と記されている。これに対し明和二年（一七六五）に津田元順・元貫父子によって編輯された『石城志』巻之四には「忠之公逝去し給ひし時、殉死の士五人あり。墓を忠之公の墓前に築けり。」と記されたあとに、深見五郎右衛門は「實相院殿一如真空 深見五郎右衛門重昌」と法名と諱が記されている。名前が「重畠」でなく「重昌」とある。他の記録には福岡藩の国学者貝原益軒（一六三〇～一七一四）が著した『御家人先祖由来記』（写 福岡市博物館蔵（屏山文庫）の「深見五兵衛」の項には「祖父五郎右衛門」しか記されず、また『博多津要録』にも「深見五郎右衛門殿」と出てくるのみである。現在の五輪塔に書かれた文字はすっかり風化して判読し難いが、現在の当主深見達之氏が陽光の照射角度の具合によって「畠」と判読するのに成功している（深見達之『深見家の歴史』二〇二〇年）。よってこの稿では「重畠」とする。

重畠には三男一女の子があり、長男の治右衛門（三五郎）が禄を踏襲して五〇〇石を食み、重畠が忠之に殉死した際には、江戸にいた黒田光之の直書の覚書により、三五郎は明暦二年（一六五六）九月十三日付けで新たに采知三〇〇石を賜っている（『黒田新統家譜 卷之一』『新訂 黒田家譜』第二巻 文献出版社 一九八二年）。三五郎の系統は明治維新までつづいている。女某は髪を下ろして仏門にはいり殉死者の冥福を修したので、藩は俸三口を給与し、二男八右衛門は秋月藩士某の養子となり、三男伊右衛門は仕官せず上土居町（現・博多区店屋町）に移住した。明和二年（一七六五）頃の上土居町は土居町流十一町のひとつで、家数五十二軒、間数百二十五間三尺四寸と記されている。ちなみに柴藤家が住んでいた西流の釜屋番は家数四十二軒で間数百十四間四寸である（『檀垣元吉監修『石城志』九州公論社 一九七七年』）。

●深見伊右衛門（二代）

重畠の三男伊右衛門は仕官せず博多部の上土居町に移り住み、身分をかくして庶民と化したという。すなわち町人深見家の始まりである。ほかの鋳物師たちの居住地はというと、大田喜兵衛兼道は釜屋町、磯野七兵衛慶永は土居町、柴藤善右衛門正治は西町である（『御国中釜屋座鉄問屋拾人相究事』『博多津要録』 一六九九年）。

万治元年（一六五八）十二月二十八日に病氣にて逝去し、下東町にあった明光寺（曹洞宗）に埋葬された。なお明光寺は明治四十三年に電車軌道付設のため東堅粕に移転しているが、伊右衛門の墓は昭和五十年に妙行寺に改葬されている（『深見家先祖聖衆位』）。

●深見甚兵衛興良（三代）

伊右衛門の長男で、通称は甚兵衛。犁鋤鍋釜などの鋳造業を始める。すなわち鋳物師深見家の始祖である。苦勞して勤めること多年、いくら熱心に働いても楽にならず。仁と義を肝に銘じて心がけ、信用第一に仕事に励み、家業を絶やすことなく精出したといわれる。

元禄九年（一六九六）十二月二十六日に病氣にて逝去。妙行寺に埋葬される（『深見家先祖聖衆位』）。

●深見甚兵衛良次（四代）

興良の長男で、通称は甚兵衛といった。

元禄十二年（一六九九）十二月、藩内の釜屋座の数が一〇戸に制限されることになったが、そのうちの二戸に入ることができた。選任された筑前国内の釜屋座・鉄問屋は釜屋町の喜兵衛（大田喜兵衛兼道）、与右衛門、土居町の七兵衛（磯野七兵衛慶永）、甚兵衛（深見甚兵衛良次）、小兵衛、西町釜屋番の善右衛門（柴藤善右衛門正治）、大乘寺前町の藤兵衛、三郎右衛門、瓦堂図師の七兵衛の九人と甘木の釜屋が入って計一〇人である（『博多津要録』）。なお、選にもれた瀬戸家は製造でなく金物類製品を取り扱う商売の道に入り、屋号を釜屋とし、深見家や磯野家といった有力鋳物業者と姻戚関係を結び、そこで生産される鍋釜類の販売を引受け経営に精励し拡大していった（『福岡県史』 四六〇頁 福岡県 一九八七年）。

享保元年（一七一六）、銀若干を藩に献上することが出来るようになり、ここに至ってようやく刻苦勉勵が実って斯界における安定期を

迎えることができた。

享保十年（一七二五）四月十五日に逝去（『深見家先祖聖衆位』）。

●深見甚兵衛善繁（五代）

良次の長男で、幼名は彦三郎、のち父の通称を継いで甚兵衛と称する。妻は森田氏から娶るが子が無かったので、藩士牧一則の三男儀助を養子にもらい森田貞次の娘をその妻に迎えた。また、那珂郡三宅村在住の藩士（無足組）堀尾久左衛門の娘を養女にするが、のち瀬戸家の七代目惣右衛門寛盛（実は森田貞次の長男、養父六代目瀬戸惣右衛門には子がなく、幼児のころから養子となる）に嫁して福岡伊崎に居住した（『瀬戸系譜』『福岡県史』近世史料編 福岡藩町方（二））。このころ瀬戸家では一族の評議により鍋釜の製造生産をやめ、職人に至るまで深見家に譲り、鍋釜等の製品の売買をすることにした。これ以降も深見家と瀬戸家との関係は永く続いている（『瀬戸家の世系』）。

元文三年（一七三八）十月五日に逝去（『深見家先祖聖衆位』）。

●深見甚兵衛昌克（六代）

養子の儀助は家を継ぐ際に、義父の通称である甚兵衛を継称した。家業に励み生産性を向上させることに努力したので家業は月ごとに繁栄し、数度にわたり金銭や品物を藩に献上したり藩からの注文に応じた。昌克の性格は心がひろく親切で節操があり、老幼の区別なく誠意をもって人に接し対処し、篤く浄土真宗の教義を信じ実際によく自ら実行した。人々の窮状を救ったりして慈善活動をもおこなったとい

う。

明和四年（一七六七）、住んでいる町の年寄役である坊正を拝命。思うに易卦における下から二つめの陰爻（易の卦を構成する二種類の爻のひとつ）は鳴謙（中位にいて恭しいこと）、節操で幸いなる者か。

是より前に妙行寺（浄土真宗東本願寺派）が類焼したのですぐに仮道場を構え、宝暦十二年（一七六二）の二月に寺の起工式をおこなった。しかしやまと起工したのに建設は行き詰まってしまい、昌克は率先して皆を励まし、費用を見積もり工程などから詳細に調べ、寝食を忘れるほど工事に尽瘁すること一三年間費やした。安永三年（一七七四）八月に竣工するが、翌年の秋、昌克は病に臥せてしまった。病気が急変するに及び息子に、本寺の堂宇がやまと出来上がったが戸も障子も未だ完成していないことを甚だ残念に思っている、よって今まさに命が尽きようとしているとき、たとえ死んだとしても悲しまずに、あなたは私のためにすみやかに計画通り実行しなさいと伝えた。このように昌克は妙行寺本堂再建に大いに功績があった。

安永四年（一七七五）八月二十二日に昌克はほほえみながら合掌してあの世に旅立ったという（『深見家先祖聖衆位』）。

●深見甚兵衛昌勝（七代）

昌克の長男で、通称は父の名を継いで甚兵衛と称した。

天明元年（一七八一）、博多の津釜屋座司となる（『福岡市史』第一巻明治篇 八二八頁 福岡市役所 一九五九年）。同年、藩命により初めて大砲数挺を製造する。その製法が充分に確立されていないときによく重

責を果たしたということで厚く賞せられ、これ以後大砲鑄造の技法が代々受け継がれ次第に精度が向上していったという。

寛政四年（一七九二）十二月二十五日に逝去（深見家先祖聖衆位）。

●深見甚平興昌（八代）

昌勝の長男で、通称は甚平と称した。

寛政六年（一七九四）、福岡藩が長崎警備のために配備する大砲鑄造を拝命。長崎港備付けの大砲二千貫目砲は口径一尺、長さ三間余、重量二〇貫もあり、同業者の嘆賞をうけたという。藩主もまたそのすぐれた技術に対し格式や増禄を下賜し、褒状賞詞を授与することが度々であった（『福岡市史』第一卷明治篇 八二八頁）。

寛政七年（一七九五）正月、幕府の禁令によりみだりに「釜屋」の標号を用いることができなくなったので、「鑄物師」と称することにした。

寛政八年（一七九六）九月、家老ら一〇数人が工場に来て、鑄造した大砲を検分した。

寛政九年（一七九七）七月、俸給二口を受給する。

寛政十年（一七九八）三月二日、長崎番所に石火矢一四挺と車台、諸具そして玉八〇〇個をあわせて献上し、黒田長順（のちの斉清）から拝領物をいただく。西泊と戸町の番所に設置された石火矢・大筒は七年ごとに火を通し磨き掃除することになっていたが、ときには石火矢三挺がひび割れで不要品となって交換されたこともあった。今回の点検も元禄五年（一六九二）以来一〇〇年近く実施されていなかった

ので、公儀の了解を得て寛政六年（一七九四）二月に佐賀藩と打ち合わせて点検を実施したところ、石火矢一二挺が打ち砕け、八挺は打破して用をなさず、このほかキズものの四挺と修理が難しい三挺の計二七挺が交換されることになった。この二七挺は鉄と唐銅の合金で、鉄分があるのでいくら磨いても経年で錆が生じていた。長崎の番所は湿気が多いので、石火矢は唐銅のみにて鑄造するように、また玉も目方がまちまちなので均一にするようにと達示があった。博多の鑄工の深見甚平興昌、山鹿五次平包茂、山鹿儀平兼賢の三人が鑄造し、福岡藩砲工の道元斉助信吉、道元慶次玉辰、一鬼弥左衛門直恒、一鬼藤八郎能遠、一鬼市之進直意が発砲した（『黒田新統家譜』卷之四十三 『新訂 黒田家譜』第五卷 文献出版 一九八三年）。

文化十一年（一八一四）五月、年行司格となる。藩が福岡庶民の格式を定め、大賀氏を首班とし以下大賀並、大賀次、年行司次上々席、年行司次上、年行司次、年行司格、年行司格次の七等級に分けられた。年行司は市尹（町の長）のもとで民政を掌る公吏で、市民のなかから家柄が良く人望がある者が選ばれてこれに任命された。深見家に対する君主の配慮は今までの積徳によるものである。興昌には男子がなく、累世の親族である瀬戸惣右衛門寛元の後妻（箔屋番の半田善兵衛の娘、のち離別）の長男吉之助を養子とする。のち儀六と称した（『瀬戸系譜』）。

文政八年（一八二五）夏、福岡市博多区蓮池町の入定寺（真言宗）にある銅造弘法大師坐像（福岡市指定文化財）を制作。背面の陰刻銘に「博多土居町住／深見甚平興昌／鑄物官工／同 儀六鎮定／大乘寺

前町／大崎正右衛門友永／文政八年初歳乙酉中夏吉祥日／工頭 同
治輔友久／同 治平友昌／仲間町住／大仏師／村上佐平一成」とあ
る。

天保六年（一八三五）十月十五日に逝去、享年五十八歳（深見家先祖聖衆位）。

●深見儀六鎮定（土居町）

文政八年（一八二五）夏、福岡市博多区蓮池町の入定寺にある銅造弘法大師坐像（福岡市指定文化財）を制作。

●深見三右衛門（大乘寺前町）

深見甚兵衛興昌の弟。幼少のころから瀬戸家にて養育され、大乘寺前町に分家する（「瀬戸家系譜」）。

●深見藤石エ門満直（厨子町）

嘉永六年（一八五三）、太宰府市の竈門神社にある三面の銅鏡「宝満宮」「聖母宮」「八幡宮」のうち主神をあらわす「宝満宮」鏡が罹災したので再鑄する。柄部に陰刻銘「鑄工 博多厨子町住 深見藤石エ門満直」がある。もともとこの銅鏡三面は寛永十八年（一六四一）に黒田忠之が寄進したもの。（『太宰府市史』建築・美術工芸編 三三三頁）。

●深見彦三郎興定（嬉春）（九代）

瀬戸寛元の三男吉松（「瀬戸系譜」では吉之助）を養子に迎え、跡継ぎにして娘の徳に配めわせた。吉松は家督を継いで名を興定と改め、通称を彦三郎と称した。のち壮年期は甚兵衛、老年期は嬉春と称したが、成長するにつれ内面的には清明で外に対しては従順であったという。家業を預かるにあたっては家訓をつくり人々はその人徳に親しんだ。

天保十二年（一八四一）、大宰府天満宮の水盤を制作。記録に「銅製 高五尺六寸／作者 包弁 瀬戸惣右衛門寛信／鑄師 深見甚兵衛興定／鑄工 高原甚右衛門秀方／高原彦七 秀準／時代 天保十二年八月／奉納者 博多 伊藤久右エ門外」とある（『供出金属品写真帳』太宰府天満宮）。

弘化五年（一八四八）三月、臼砲（モルチール砲）と物砲（ホーイツル砲）を制作。その出来栄えは長年積み上げてきた練達の成果と見ることができると。

嘉永七年（一八五四）二月、長崎石火矢制作に使用した地銅の余分（銅・真鍮・唐赤銅あわせて二五〇〇〇斤ほど）でもって、余分の石火矢を鑄造し差し上げる許可を、瀬戸佐作（儀寛）と瀬戸惣右衛門（寛信か）との三名連署で町役所に申請した。これに対し町役所から差し上げるといふ奇特な願い出を許容するとの回答があったという（『福岡県史』近世史料編福岡町方（二））。五月十六日、藩主黒田長溥がやって来て大砲制作の作業場を視察。この後数回にわたって来訪しており、その度に手厚い持てなしをおこない、お褒めをうけることが職工にも及

んだ。

安政三年（一八五六）十月二十六日、興定の子の武丸正助の百箇日にあたり、藩は市尹に法会を修するように命じて尊崇の意を表すことにした。子興禎はつとに父興定と比較して語られる。招かれて説法の座に列し、齋供（法会のときの食事）を賜った。興定は同僚に伝えてから忌辰（忌み避ける不吉の日）ごとに人々を萬行寺（浄土真宗本願寺派）と徳榮寺（同）に集め正助像を安置して法要をおこない、僧侶に正助のことを語らせ葬倫（人の守るべき常の道）を説法させた。このことは毎年の恒例としたが、まだ数年しかたっておらず人々の心に浸透したわけではないので、藩が特に熱心に勧めた。十二月、博多年行司（一年交替で勤める総代・世話人などの当番役）に抜擢されて就任。翌年四月には大賀並に列せられる。そんな大きな役職についても穏やかにして節度をまもり、人情にとみ道理をはずすことはなかった。ので人々は皆すすんで服従したという。

安政五年（一八五八）七月、大悲王院（真言宗）の雲版を制作。雲版の表面には施主として「野坂常德 瀬戸寛信 深見興定 瀬戸寛敏」の名が陰刻されており、深見家と瀬戸家とが並記されている（雷山千如寺の寺宝展）福岡市博物館 二〇一〇年）。十月、幕府の目付役木村図書らがオランダ人数人とともに軍艦朝陽に乗って来博し、鋳物の作業場を見学した。

安政六年（一八五九）十二月、永世年行司格次に列せられる。しかし翌年の初冬には老病を理由に職免を申請するが、なかなか受け入れられず。しかも博多の坊正たちが連署して慰留を藩に申し出た。興定

は固辞したが聞いてもらえないでいたが、一月後にやっと許されて木盃および絹帛が下賜され、なおかつ修身絹布の短挂を着用することが許された。人格と技能の両方が優秀ということで特別扱いとなった。

文久二年（一八六二）の冬、隠居して嬉春と号す。

文久年間（一八六一―一八六四）に完成した『筑前国続風土記拾遺』に、土居町上には刀工信国何某が住し、さらに鋳工（鋳物師）の忠平、甚平（甚兵衛）、七左衛門の三戸があり、そして釜屋源七がいたと記されている。

明治十二年（一八七九）十月五日、逝去。

●深見甚三郎興禎（十代）

天保元年（一八三〇）の生まれで、初め平次郎と称し後に甚三郎と改めた。亡父は興定で亡母は深見家の者である。人柄は賢く穏やかで慎み深く、孝行者で親に真心をもって仕えたので、たびたび藩から善行表彰を受けている。よく父祖の業を継ぎ、もっぱら家業に尽力し、しばしば大坂に行つてその道を研鑽しついに奥義を窮めたという。

文久三年（一八六三）初夏、藩主黒田長溥の跡継ぎの長知が、大砲をつくる作業を見にたびたび来訪し親しく褒賞を与えた。十一月には秋月藩の熱心な求めに応じ、工具を馬の背に積んで工匠を率いて赴き大砲数挺を製作し、さらにその製法を伝授し手厚い報酬を得た。

元治元年（一八六四）八月、唐銅を用いて二十貫弾の大砲を鋳造した。その規模は従来のものにくらべ幾倍もあるため鑪（ろ）二個を新設し、このほかにも新たな設備を増設した。経営は順調で細かな点にまで注

意が行き届いていた。時に藩主が重臣をつれて来訪し、作業を見終わると大いにその成熟ぶりを褒めたたえ、工匠にまで慰労して褒美を与えた。かつて家老の野村氏のために砲二挺を製作したとき、野村氏が試射してその精度に感心し自得流の短鎗を贈ったという。

慶応二年（一八六六）の頃の博多の鋳物業は、『博多店運上帳』（櫛田神社蔵）には釜屋番の柴藤善左衛門、大乘寺前町の礒野七平、同じく大乘寺前町の深見甚平・平次郎の三家が記されている。土居町の深見家が鋳物師の部で一四〇〇〜一九〇〇匁の運上をおこない、柴藤善左衛門が七〇〇匁、他の町屋が数匁ないし数一〇匁であるので、断突群を抜いた運上金を献上している（『柴藤家年中行事』 秀村選三編『近世福岡博多史料』第一集（財）西日本文化協会 一九八一年）。

明治元年（一八六八）十一月、年行司に選出されるが、翌年に病気を患い辞表を提出。しかしこれが聞き入れられず、さらに翌年の五月に強く依頼して了承され、その間の功勞により一代大賀次上席に列せられた。その後はもっぱら農機具の改良に力をそそぎ、数年後には各種の改良鋤や犁を制作したので、利用者の評判よく需要が伸びて、国内に広く普及し、黒田藩に良い結果をもたらした。

明治十三年（一八八〇）初秋、信仰心が深まり阿弥陀像を購入（原稿用紙に記録）。

明治十九年（一八八六）一月、深見平次郎、礒野七平、瀬戸惣太郎、渡邊興三郎、奥村治七、田中昌吉郎、新島藤七、中村清三、堺宗米らとともに、貧しい人々を救済するにあたって唧筒せうとうを新調するための寄付金を出したので、福岡県庁より木盃が下賜される（『福岡日日新聞』

明治十九年一月十三日三頁）。

明治四〇年（一九〇七）某寺塔頭の新築に際し銅像鑄造。

明治四十一年（一九〇八）一月四日に病にて逝去、享年七十八歳。

九日の午後四時自宅出棺、妙行寺（川口町）にて葬儀、累代の墓に葬られる。会葬者は各宗僧侶有志者など一〇〇〇名を越える盛葬であった（『福岡日日新聞』明治四十一年一月十二日）。

● 深見甚次郎

天保四年（一八三三）の生まれで、平次郎の厳君（『福岡日日新聞』

明治三十六年五月二十二日四頁）。

明治三十六年（一九〇三）五月二十日午前十一時より、親戚知人を

招待して、深見平次郎の厳君甚次郎の古稀祝宴を催す（『福岡日日新聞』

明治三十六年五月二十四頁）。なお、甚次郎の古稀自祝宴は十七日から

二十日までの四日間おこなわれた。二十日は市内の主立った人々や新聞社員らを招いての鄭重な饗応があり、たいへん盛況であった（『福岡

日日新聞』明治三十六年五月二十二日四頁）。

● 深見甚平（大乘寺前町）

慶応二年（一八六六）の『博多店運上帳』に、釜屋番に鋳物師柴藤

善左衛門、大乘寺前町に鋳物師礒野七平、同じく大乘寺前町に深見甚

平・平次郎の三氏が記されている。

●深見藤兵衛

明治二十三年（一八九〇）四月、元寇記念碑建設費として金三円を寄付（『福陵新報』明治二十三年四月二十四日三頁）。

●深見彌三郎

明治二十三年（一八九〇）四月、元寇記念碑建設費として金五十銭を寄付（『福陵新報』明治二十三年五月十一日三頁）。

●深見儀助

明治三十年（一八九七）、東長寺の半鐘に賛助人として陰刻されている。

●深見太平

明治三十五年（一九〇二）六月十日、福岡県会議事堂で開催された福岡県特許証主協議会に商工会議所の一員として出席（『福岡日日新聞』明治三十五年六月十一日）。

●深見甚右衛門（上厨子町）

明治三十八年（一九〇五）五月二十八日、新築家屋上棟式及び妻の古稀と自分の初老の自祝宴を開催（『福岡日日新聞』明治三十八年五月二十七日）。



日蓮上人銅像台座レリーフ



日蓮上人銅像台座レリーフ
（上図の右下部分）

●深見平次郎興盛（十一代）

安政六年（一八五九）八月十六日、福岡区上土居町の瀬戸實弥多の三男（『深見家先祖聖衆位』では釜屋惣右衛門（瀬戸寛信）の二男とある）として生まれる。幼名は羊之助といい通称は平次郎。四歳のときに甚三郎興禎（十代）の養子となる。寺子屋で教育を受け、成人してからは書画骨董類の蒐集を趣味とし、これには相当鑑識眼があったらしい。ほかに子供の頃から修行してきて素人離れといわれた謡曲を好み、これは祖父彦三郎興定が博多でも有名なほど堪能であったというから幼少のころから叩き込まれたと思われる。そして成人になってからは中土居町の船津権平（喜多流）に師事してさらに磨きをかけている。なお、煙草は吸わず、酒はお銚子を一本たしなむぐらいであったという（『深見平次郎君』「天福岡今昔人物誌」）。

明治十一年（一八七八）十二月三十日、十代甚三郎興禎の隠居により家督を相続（改製原戸籍）。制作年は不明だが朝倉市三奈木の清岩

寺（曹洞宗）に「鑄工深見興盛」の銘がある半鐘がある。先代に続いて秋月との関係を知ることができる。

明治十四年（一八八一）六月、第二回内国勸業博覧会（三月一日～六月三十日、東京・上野公園）に農具を出品、褒状を受賞（『耕耘墾具』深見商店鑄造所 昭和九年カ）。

明治十九年（一八八六）一月、博多麴屋町二十二番地の福岡商法会議所内に仮事務所があった、福岡くらぶの会員広告（第一回）に氏名が掲載される（『福岡日日新聞』明治十九年一月三日四頁）。同月、深見甚三郎、磯野七平、瀬戸惣太郎らとともに、貧民救済のための唧筒新調の寄付金を出したので福岡県庁より木盃が下賜される（『福岡日日新聞』明治十九年一月十三日三頁）。

明治二十一年（一八八八）七月八日に箱崎松原にて、故玄洋社長箱田六輔の記念碑落成祭ならびに十年役戦死者の招魂祭が挙行された。その記念碑建設費として一円五〇銭を寄付する（『福陵新報』明治二十一年七月十日四頁）。

明治二十二年（一八八九）、福岡市第二区長に当選。爾来福岡市名誉参事会員、所得税調査員（数回）、博多商業会議所議員（数回、さらに在職中に副会頭や常議員となる）、東消防組組頭、福岡市会議員（数回）、博多財産区会議員、博多学区会議員（数回）、内国勸業博覧会審査委員等の福岡市の公職を歴任。嘱託では各博覧会品評会の出品奨励、日本赤十字社特会員などを担った（『深見平次郎君』『大福岡今昔人物誌』）。

明治二十三年（一八九〇）一月、元福岡警察部長湯淺丈雄がすすめ

ていた元寇記念碑建設に賛成し義捐金三〇円を寄付する。同じころに小川小七が金三〇円、林徳平が金一一円、杜家間善次郎が金一〇円を寄付している（『福岡日日新聞』明治二十三年一月二十四日）。三月、元寇記念碑起工式のために金一円を寄付する（『福岡日日新聞』明治二十三年三月二十日二頁）。四月二十二日、妙行寺にて会合しその組織の大体をかためた磯野七平を頭取とする博多荷主組は、為替取扱のため筑紫銀行出張所を福岡市内と久留米市内の二ヶ所に設けることと、九州鉄道会社に対して筑後地方より送り出す茶や臘、紙などの荷物の運賃割引を申請することにした。平次郎はこの博多荷主組の相談役で、他に山崎藤四郎、中尾卯平、柴田治三、奥村利助、下澤善四郎、波多江嘉兵衛、吉田又吉、野村久吉、太田清蔵、和田精一、大山與四郎、深澤伊三郎、堺宗一郎、内海善兵衛、山崎又七、平岡則孝、杜家間善次郎、梅崎源吉が相談役でいる（『福陵新報』明治二十三年四月二十四日二頁）。

明治二十八年（一八九五）一月十三日、對外実業協会創立集会および県下実業家大懇親会が東公園一方亭にて開催され出席する。博多商業会議所特別会員の宮城坎一が對外実業協会創立の必要性、および博多商業会議所会員が該協会の創立を発起したその理由を演説した。出席者は五三名（『福岡日日新聞』明治二十八年一月十五日三頁）。五月七日、福岡市会に出席。市長候補者に奥山亨が二三点を獲得して当選し、市会議長に不破國雄が二二点で当選した（『福岡日日新聞』明治二十八年五月八日三頁）。六月二十日、集成館において催された九州同盟銀行の発起による九州実業家大会に出席。議長は小河久四郎、他に磯野七平、太田清蔵、遠藤甚蔵、平岡浩太郎、大熊浅次郎、麻生太吉、深川嘉一郎、

三谷有信、野田卯太郎など福岡県下および九州各地の実業家巨商が参加した（『福陵新報』明治二十八年六月二十二日二頁）。また会場三階の古器物陳列会場には、蒐集した古書画類が出陳された。七月、博多上呉服尋常小学校へ幻燈機購入費用として金一五円を寄付する。同じく同学区内の進藤上枝が金一二円、田中昌吉郎が金一〇円を寄付している

（『福岡日日新聞』明治二十八年七月七日三頁、『福陵新報』同）。七月十一日、第四回内国勸業博覧会（四月一日〜七月三十一日、京都・岡崎公園）

に出品していた犁頭六種が褒状を受賞（『耕耘犁具』、『福陵新報』明治二十八年七月十七日二頁）。ちなみに磯野七平が出品した犁頭六種は有功三等賞を受賞している（『福陵新報』明治二十八年七月十六日二頁）。九月、滞福中の東京の刀剣鑑定家本阿弥親義から、所有している刀剣（相宗貞宗）が黄金三五〇枚の価値を有する名刀であると鑑定される（『福陵新報』明治二十八年九月六日三頁）。九月十日、日清戦争等における軍人の忠死者鎮魂のための鎮魂記念碑建設に賛同していたが、福岡衛戍内の偕行社にて開催された協議会に参加できず代理人を出席させる（『福岡日日新聞』明治二十八年九月十一日二頁）。しかし『福陵新報』には太田清蔵、渡邊與三郎、進藤喜平とともに、参加者二八名のひとりに名前が掲載されている（『福陵新報』明治二十八年九月十一日二頁）。十月一日、第三番小学区会が福岡市役所にて催され、議長及び代理者の選挙において代理者に選出される。議長には堺宗一郎が当選した（『福岡日日新聞』明治二十八年十月二日三頁）。十一月十三日、第四回内国勸業博覧会（京都市）への福岡市出品者褒賞授与式が集成館で挙行されたので出席する。なお、受賞者総代として磯野七平が答辞をおこなった（『福陵

新報』明治二十八年十一月十四日三頁）。同月十五日、聖福寺にて盛大におこなわれた日清戦争以後の博多出身の忠死軍人追吊法会に金七円を寄付する（『福陵新報』明治二十八年十一月十三日二頁）。

明治二十九年（一八九六）一月、太田清蔵創立委員長と渡邊渡三郎および是松右三郎創立常務委員らによって創立発起された博多紡績会社の発起株一〇〇株を入手。なお初期払込会員は一株につき五円宛とのこと（『福岡日日新聞』明治二十九年一月二十四日）。四月二十二日から二十七日まで開催の福岡物産五品々評会に鋤先を出品（『福岡日日新聞』明治二十九年四月二十五日二頁）。六月、遠賀郡洞北村の常福寺（浄土宗）に直径二尺三寸の梵鐘を制作し納める。その出来の良さに門徒一同は満足していると伝えられる（『福岡日日新聞』明治二十九年六月六日）。六月、福岡通丁の大社教福岡分院の祠殿や舞台、講堂等の新築工事が完成したので、瀬戸惣太郎、瀬戸新次郎とともに錦の御戸張（代価一五〇円）を東京の宮内省御用織立屋高田茂に注文し奉納する（『福岡日日新聞』明治二十九年六月十二日）。十二月末取調べの各工場の状況は深見

鋳物工場（福岡市下厨子町、持主は深見孫平、明治三年一月創業）が職工男性二七名、製造品数量二六、〇〇〇、同上価額二、八〇〇円。深見鋳物工場（福岡市上土居町、持主は深見孫次郎、寛元三年（一二四五）三月創業）が職工男性三五名、製造品数量九九、八五〇、同上価額一八、六六四円である（『福岡日日新聞』明治三十年十月三十一日二頁）。

明治三十年（一八九七）一月、博多瓦斯株式会社が発起願いを、磯野七平、立石善平、吉田又吉、是松右三郎、津田利夫、太田清蔵、許斐儀七、野村祐雄、前田辰、下澤善四郎、波多江嘉平、津田守彦、小

河久四郎、中尾伊作、有吉七郎らとともに其の筋へ進達する。会社の資本金は一五万円で一株五〇円、本社の所在は東中洲。機関等は欧米の最新式を取り入れ、福岡市内におけるガス灯に使用するガス燃料等を提供し、広く公私の便益を図る目的であった（『福岡日日新聞』明治三十年一月二十六日）。三月、福岡警察署より博多対馬小路までの電話線架け換え、および土居町交番所より萬行寺町に至る往復線架設の電話機据え付け工事の費用を磯野七平とともに寄付する（『福岡日日新聞』明治三十年三月三十日四頁）。五月、京都西本願寺を会場にわが国最初の博覧会が開催されて四半世紀、その創設二十五年記念博覧会（四月一日～五月二十日、京都市岡崎公園）に農具を出品して記念状を拝受する（『耕耘犁具』）。同月十九日、豊臣秀吉を顕彰する豊国会長であり貴族院副議長の黒田長成侯爵招待会を、集成館で開催するにあたり準備委員庶務掛を担当する（『福岡日日新聞』明治三十年五月十六日二頁）。なお、翌年四月十二日に京都市阿弥陀ヶ峰でおこなわれた、大谷光尊師（浄土真宗本願寺派法主明如上人）による豊公三百年祭法会に黒田長成会長も出席している（『福岡日日新聞』明治三十一年四月十六日三頁）。

明治三十一年（一八九八）四月、宮内省より御買上の栄に浴す（『耕耘犁具』）。四月、第三回五二会全国品評会に出品した農具が有効銅牌を受賞（『耕耘犁具』）。四月、宮内省より御用品として御買上の栄を賜う（『耕耘犁具』）。五月三日から九日まで、博多の豪商伊藤小左衛門と神屋宗湛の追悼法要を営み、大石碑を建設するために、京都大徳寺（臨濟宗）の前管長管廣洲大和尚による大授戒式を挙行しその發起人のひとりとなる。發起人はほかに太田清蔵、深澤伊三郎、是松右三郎、社

家間善次郎など三一人である（『福岡日日新聞』明治三十一年二月十六日五頁）。十月十二日、日本生命保険株式会社福岡代理店を引き受け、本日より博多土居町十九番地ノ一に事務取扱所を置き、代理店事務取り扱いおよび被保険人募集をおこなう。そしてこれまで第十七銀行へ振り込んでいた掛け金は同事務所へ振り込ませることにする（『福岡日日新聞』明治三十一年十月十六日五頁）。

明治三十二年（一八九九）二月二十二日午前五時半過ぎ、博多上土居町の家の裏手より出火、雨中にもかかわらず北の風に吹かれ見る間に炎上。所有家一棟三戸を全焼、近隣二戸も半焼させて同六時過ぎに鎮火した（『福岡日日新聞』明治三十二年二月二十三日五頁）。出火の原因は火業場の残り火かまたは他所からの出火か不明のため取調中とのこと（『福岡日日新聞』明治三十二年二月二十四日五頁）。三月二十九日、博多商業会議所会員の半数改選および補欠選挙の予選会が開催され、法人を含む一八候補者の一人に選出される。ほかに前田辰、關運七、高山卯右衛門、池稻蔵、十七銀行、博多煙草合資会社、農工銀行、門司儀莊、遠藤甚蔵、松下榮次郎、渡邊渡三郎、平田清三郎、田島太平、岡松與八、長野嘉平、山本六次郎、石蔵万吉がいる（『福岡日日新聞』明治三十二年三月三十一日二頁）。同月三十一日、東中洲共進館でおこなわれた博多商業会議所会員半数改選および補欠選挙において、一九二点を獲得して岡松與八とともにトップ当選した。渡邊與三郎は一九一点だった（『福岡日日新聞』明治三十二年四月一日）。四月十三日、福岡商業会議所にて臨時総会が開催され会頭、副会頭、常議員らが選出され、閉会后に東中洲福村家に於いて新旧会員の懇親会が開催された。会頭に小河

久四郎が選出されるなど一二名の新役員が決まったが、平次郎は何にも選出されなかった。しかし懇親会には出席した（『九州日報』明治三十二年四月十五日二頁）。同月十五日、太田清蔵、大熊淺次郎、河原田平助ら博多の実業家諸氏二三人とともに、東公園一方亭に滞福中の初代福岡市長であった山中立木と金山尚志両氏を招いて宴会を開催。たいへん盛況であった（『福岡日日新聞』明治三十二年四月十六日）。六月一日、博多港出入船舶の繋船場の築造や埋立地売却などのため博多築港株式会社が設立され、平岡浩太郎とともにその発起人のひとりとなる。

発起人引受株一三五五株のうち一〇〇株を引き受ける（『福岡日日新聞』明治三十二年六月二日）。七月、糟屋郡箱崎町の旧社領であった社家町唐町に住む青年二〇余名が、一昨年の伊勢参りの記念として、深見鑄造所に注文した直径二尺五寸の大鈴を八幡宮に奉納した（『福岡日日新聞』明治三十二年七月二十一日五頁）。九月、博多協同団体及び有権者の有志より推薦を受け、県会議員選挙に立候補する。その推薦理由は平次郎が「有力なる協同団体の一員にして資産あり名望ある実業家」であることと、「氏は固より清廉潔白の士なる」とのこと。投票は九月二十二日に福岡市役所にて実施され、その開票結果は投票数六五二票のうち九七票を得たが、小野隆助、太田清蔵とともに次点であった。なお当選は二九五票の林寛一郎と二三四票の小野隆太郎であった（『福岡日日新聞』明治三十二年九月二十二日二頁、九月二十二日二頁、九月二十三日二頁）。

十月、有栖川宮熾仁親王（なつひと）を総裁にいただく伊勢神宮神苑会は、福岡県委員に小林重威参事官、福岡市委員長に松下直美福岡市長、門司市委員長に廣澤哲郎門司市長、福岡市委員に松尾廣太郎と服部潔らに依頼

し、さらに福岡市名望家として平次郎をはじめ前田辰、波多江嘉平、社家間善次郎、古森眞太郎、中尾伊作、許斐儀平、中野和四郎、山下圓造、遠田逸郎次らが委員の囑託を受けた（『福岡日日新聞』明治三十二年十月二十日二頁）。そして、同会へ金一〇円を寄付した（『福岡日日新聞』明治三十二年十月二十八日）。十二月二十日、鎮西倉庫会社設立の発起代表者のひとりとなる。資本金は二〇万円で、創業事務所を博多馬場新町に置き、支店を直方と若松に置いた。発起代表者は他に渡邊與三郎、是松右三郎、太田勘太郎、奥村虎吉、藤井善作らがいた（『福岡日日新聞』明治三十二年十二月二十一日一頁）。この年、旧来の輪組織（あしじ）を廃止して人馬を併用し、さらに石油発動機を用いた工場へと改良し、同業者を一步抜いた業績をあげた（『福岡市史』第一卷明治篇八二八頁）。

明治三十三年（一九〇〇）五月四日、東宮（皇太子）の御婚礼の慶事につき、福岡市奉祝準備委員会が福岡市役所楼上にて開会され、小河久四郎らとともに庶務部委員を担当する（『福岡日日新聞』明治三十三年五月五日一頁）。五月十二日、鎮西倉庫会社設立総会が東公園一方亭に於いて一一〇余名が出席して開会。選挙にて発起者のひとりである麻生多次郎が会長に選出され、平次郎は重役として監査役の任についた（『福岡日日新聞』明治三十三年五月十五日）。なお、鎮西倉庫会社は五月二十三日に登記の許可がおりて二十五日から開業した（『福岡日日新聞』明治三十三年五月二十五日）。十一月一日、立憲政友会福岡県支部の発会式があり、このあとの常磐館に於いて開催された懇親会に出席。出席者は政財界から五〇〇余名が出席した（『福岡日日新聞』明治三十三年十一月二日一頁）。

明治三十四年（一九〇一）四月二十三日、博多商業会議所にて同会議所役員会が開催され出席する。ほかの出席者は石蔵利助、渡邊渡三郎、岡松興八、山崎清五郎と特別会員の大野未來、林寛一郎、高橋光威の計八氏である（『福岡日日新聞』明治三十四年四月二十四日一頁）。五月、市税の多額納入者として名が公表される。福岡市の各学区会議員選挙人名簿によると平次郎は三番学区で一〇一円五錢三厘を納めて、博多電燈会社、渡邊與三郎について第三位の高額納税者になっている（『福岡日日新聞』明治三十四年五月三十一日三頁）。同月、全国生産品博覽会に出品した農具が進歩三等銅牌を受賞（『耕耘犁具』）。八月三日、福博商工会の仮創立会が常磐館にて開催され、河内卯兵衛らとともに常議員になる。なお発起人総代でもある会頭は渡邊與三郎になっている（『福岡日日新聞』明治三十四年八月六日）。同月十五日、勤儉貯蓄奨励会の実行するため、博多商業会議所において開催された福博貯蓄奨励会の発起人会に出席し会員となる。ほかに出席者は中尾伊作、上野彌太郎、渡邊與三郎、林寛一郎、高橋光威、緒方道平、小河久四郎、波多江嘉平、許斐儀七、大野未來、松下榮次郎、松下直美、岡部寛である（『福岡日日新聞』明治三十四年八月十六日）。九月ころから各自貯蓄預金を実行しているが、その主旨は率先模範となって一般市民に貯蓄思想を発揮してもらうことで、貯蓄銀行にても会員に限り高利子がつく特約があった。なお、同会の事務所は博多商業会議所内に置かれた（『福岡日日新聞』明治三十四年十一月七日一頁）。十一月、立憲政友会福岡県支部拡張のため、波多江嘉兵衛、丸田重雄、松下榮次郎とともに評議員に推薦される（『福岡日日新聞』明治三十四年十一月十三日）。なお十一月十六日に

常磐館において開催された支部の秋季総会に臨席するため、本部総務委員の金子堅太郎と原敬両氏が来福する（『福岡日日新聞』明治三十四年十二月九日）。この年から二年間の任期で博多商業会議所の副会頭を緒方道平とともにつとめる。その後は常議員を歴任し、明治四十三年（一九一〇）には再び許斐儀七とともに副会頭になる。博多商業会議所は明治十二年四月に有志者によって設立された福岡商法会議所に始まり、事務所は福岡第十七国立銀行（現・福岡銀行）内にあった。同二十一年には太政官布達により福岡商工会と改称するが、同二十三年には商業会議所条例により再び博多商業会議所となっている。事務所は博多東中洲に福岡県が所有していた共進館の一部を賃借していたが、事務拡張により同三十五年には会議所の建物を新築した。明治四十三年四月に博多商業会議所が発行した「月報附録 福博商工人名録」の金物商の項には、「上土居町一七 兼鑄物業 磯野七平／上土居町九 兼鑄物業 深見平次郎」の二軒が記されている。

明治三十五年（一九〇二）二月二十日、東中洲共進館において開催された実業団体聯合会評議員会に農具部門を代表して出席。このとき筑豊礦業組合、朝倉志波煙草組合とともに福岡市農具組合の三団体加入が報告され、同時に第五回内国勸業博覽会福岡県出品協会規則が協議され決定された（『福岡日日新聞』明治三十五年二月二十一日一頁）。四月十八日、第二回福岡県重要物産品評会に農具を出品し、常磐館に於ける褒賞授与式にて農具の部で二等賞木盃を受賞する（『耕耘犁具』、『福岡日日新聞』明治三十五年四月十九日一頁）。同月二十六日、東公園一方亭で開かれた来福中の我國の政財界の重鎮井上馨を迎えての招待会に出

席。出席者は野田卯太郎、麻生太吉、平岡浩太郎の三代議士はじめ貝嶋太助、渡邊與三郎、大熊浅次郎、森田正路、岡茂平ら総数四五名（『福岡日日新聞』明治三十五年四月二十九日一頁）。五月、第二回全国製産博覧会に農具を出品し有効二等賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。同月二十四日、東公園一方亭に於いて博多演劇会社発起人相談会が開かれ、仮定款を決定し株式募集のための協議がなされた。博多には教楽社や榮楽座、雄鷹座^{ゆたかざ}などの劇場があったが、老朽化しており衛生の面からも新改築が望まれていた。この新会社は教楽社と榮楽座の両座合併新築というかたちで、東京大阪の劇場を模した九州一の規模をめざしたもので、その計画に平次郎ら有力な賛成者五〇余名がそろったので株式募集等の具体的動きを始めた（『福岡日日新聞』明治三十五年五月二十三日、二十四日四頁）。六月二十二日、常磐館に於いて開催された福博商工会役員懇親会に出席。福博商工会創立以来の事業成績が報告され、成功例として福岡県立工業学校染織科移転に関する件、街路取締方の余り厳格に失するに付其筋へ申請の件、九州鉄道会社に対し荷物運賃割引交渉の件、人力車夫の弊風改良に付其筋へ交渉の件、第二回本県重要物産品評会を福岡市に設置の件、九州医科大学を福岡に設置連動の件が報告された（『福岡日日新聞』明治三十五年六月二十四日）。九月十二日、福岡藩祖黒田如水公追遠のため崇福寺を改築することになり、松下直美会長のもと黒田一義、平岡浩太郎らとともにその募金活動の発起人となる（『福岡日日新聞』明治三十五年九月十四日）。十月十日、博多停車場にて、上京する福岡日日新聞社の前主筆高橋光威を見送る。ほかに見送り人は多田勇雄、藤金作両代議士、深野一三前県知事、松下直美福岡市長、

小河久四郎商業会議所会頭、渡邊與八郎福博商工会長らでホームは雑踏を極めた（『福岡日日新聞』明治三十五年十月十一日一頁）。十一月一日、東京帝国大学農科大学農学教室に、参考用として唐鋤先二個ほか三五点を寄付する。その謝礼として木盃一個が賞与された（福岡県知事正五位勲三等河島醇よりの賞状 明治三十五年十一月一日）。同月二十五日、博多商業会議所に於いて同会議所議員選挙が行われ、立石善平、林寛一郎、大隈壮太郎とともに選挙委員をつとめる。なお選挙委員長は松下直美である（『福岡日日新聞』明治三十五年十一月二十二日）。その結果は選挙有権者総数四九八人に対し二九〇人が投票し、規定得点数一七点以上を獲得した二七人が当選した。平次郎も三三点を獲得し六位で当選した（『福岡日日新聞』明治三十五年十一月二十六日）。十二月一日、京都府立農学校へ鋤先五四点を備品として寄付。その謝礼として木盃一個を拝受する（京都府知事従三位勲二等大森鐘一よりの賞状 明治三十五年十二月一日）。平次郎は販路拡張のため優秀な改良型を各大学の農学部や各府県農事試験場、農学校、農業会などに見本および実験用として送付した。同時に多くの技術員も派遣して使用法の講習会を開くなど、深見式深耕犁の普及に尽力し、わが国の農業発展に寄与した（『福岡市史』第一卷明治篇 八二八頁）。同月十四日、博多商業会議所に於いて行われた同会議所議員欠員補充選挙に選挙委員として立ち会う。選挙委員長は松下直美、ほかに選挙委員は立石善平、佐伯武平、遠藤甚蔵。しかし生憎の天気もあって投票数は伸び悩んだ（『福岡日日新聞』明治三十五年十二月十六日一頁）。同月二十二日、前日付け大阪朝日新聞が十七銀行の破綻および博多米穀取引所の虚偽増資を報じたので、経済界の動揺を未然

に防ぐため博多商業会議所と福博商工会、博多実業倶楽部そして実業家有志が博多商業会議所に集まって協議し、報道されたことが事実無根であるとして関係者九人連名で異常無いことを訴えた（『福岡日日新聞』明治三十五年十二月二十三日一頁）。

明治三十六年（一九〇三）三月六日、県会議事堂における衆議院議員選挙会の立会人を、奥村吉五郎、大野未来、大隈壮太郎とともにつとめる。選挙長の河嶋醇県知事が開票管理者の報告書を調査し、得票者の氏名およびその得票数を朗読。その結果平岡浩太郎をもって当選人と定め、作成した選挙録を朗読して立会人とともに署名した（『福岡日日新聞』明治三十六年三月七日一頁）。同月二十二日、太宰府の日本画家吉岡拝山が発起し深見鑄銅場が鑄造した、菅公頌徳碑の建設式が太宰府天満宮境内東梅園の噴水池の畔にて挙行された。高さ一丈、重さ二〇〇貫のもので、上方額面の「頌徳碑」の三字は黒田長成による揮毫で、下方には拝山の揮毫と梅花のレリーフがつくられた。その費用はとても募金分ではまかなうことができず、平次郎の貢献によるところ大であったという（『福岡日日新聞』明治三十六年三月一日、十三日）。五月十七日から四日間、平次郎の厳君甚次郎の古稀祝宴がおこなわれた。最終の二十日には市内の主だった人々や新聞社員らが招かれての鄭重な饗応があり、たいへん盛況であった（『福岡日日新聞』明治三十六年五月二十日四頁、二十二日四頁）。六月十八日、台湾の台中庁物産陳列館へ、唐鋤などの農業用道具六九点を寄贈（台中庁よりの感謝状 明治三十六年六月十八日）。第五回内国勸業博覧会（三月一日～七月三十一日、大阪市）に出品した鋤先と釜がそれぞれ三等賞を受賞し、その褒賞授与式

が七月二日に天皇陛下名代の伏見宮貞愛親王臨席のもと開催された。なお、同様に鋤先と釜を出品していた磯野七平もそれぞれ同賞を受賞している（『福岡日日新聞』明治三十六年七月四日一頁）。七月に入り福博商工会の渡邊與三郎会長は、商工会の理事並びに常議員の改選にあたりその選定方を一任されたので、理事長と書記は従来通りの深澤伊三郎と多久虎作を指名し、続けて理事二名と平次郎を含めた評議員四〇名を選出した（『福岡日日新聞』明治三十六年七月二十三日一頁）。八月二日付けの『福岡日日新聞』に「農具改善に就て 農具の改善は農業改良の急務に属すと雖も当業者自ら之が試験的選択を為し得るもの少し而して偶^{たま}有益なる発明製作に係る器具あるも其応用区域甚だ狭隘にして 本邦に於ける農具の改良は実に遅々たるの状況なれば 之れが研究調査を為すの必要ありとて 其筋にては二三府県農事試験場を撰み農事試験場国庫補助額を本年度限り金一千円宛増加して農具の試験及調査を為さしむる筈なれば 本県農事試験場に於ても右希望あらば之に對する施設を具し主務省に開申すべしとなり 因に改良農具の種類は専ら犁、鋤、除草脱穀に要する器具なり」という記事が掲載された（『福岡日日新聞』明治三十六年八月二日一頁）。八月二日午後六時より常盤館に於いて、福岡畜産株式会社合資会社の第一回株主総会が開かれ、議案可決ののち選挙がおこなわれ、関運七と太田勘太郎とともに監査役に選出された（『福岡日日新聞』明治三十六年八月四日三頁）。同月十一日、博多商業会議所総会において会頭の小河久四郎議長から、大隈壮太郎、服部利明、佐伯部平、渡邊渡三郎らとともに委員に指名される（『福岡日日新聞』明治三十六年八月十三日一頁）。同月二十一日、聖路易万国博

覧会福岡市当業出品協議会が福岡市役所において開催され、農具部門に磯野七平とともに出席した（『福岡日日新聞』明治三十六年八月二十二日一頁）。さらに同日の午後八時より博多商業会議所にて開かれた総会に出席する（『福岡日日新聞』明治三十六年八月二十三日一頁）。九月九日に博多財産区会が福岡市役所楼上において開催され、貯蓄寄付金受領等が可決され、平次郎は軍事公債の金一〇〇円を寄付した。ちなみに太田清蔵は金一五〇円、渡邊與三郎も金一五〇円、河原田平助は金七〇円、岩崎庄三郎は金五〇円であった（『福岡日日新聞』明治三十六年九月十日三頁）。

明治三十七年（一九〇四）一月二十八日に鎮西倉庫会社定時総会が常磐館において開催された。三十六年度分決算報告並びに営業報告が満場一致で可決されたあと、引き続き行われた役員改選にて監査役に再任された（『福岡日日新聞』明治三十七年一月三十日一頁）。二月に台湾の第一回嘉義庁農産物品評会へ、唐鋤先一三点を出品し寄贈する（嘉義庁長岡田信興よりの感謝状 明治三十七年四月十五日）。三月五日、大阪府立大阪商品陳列所へ鋤七四個を寄付。その謝礼として木盃一個を拝受する（大阪府知事正四位勲三等高崎親章よりの謝状 明治三十七年三月五日）。四月に喜多嶋醇、香江誠とともに、都合による理由で市会議員の辞任届を提出する（『福岡日日新聞』明治三十七年四月五日二頁）。この頃に内国製産品品評会に農具を出品し、三等賞銅牌および一等褒状を受賞（『耕犁』）。五月に第三回全国製産品博覧会（四月一日～六月九日、京都府）に出品した農具が二等賞銀牌を受賞（『耕犁』）。曩に福岡県立農学校へ実習参考品として犁先七四種と陳列台二個を寄贈したとこ

ろ、知事から木杯一個が贈られた（『福岡日日新聞』明治三十七年五月十四日四頁）。貴族院副議長の黒田長成が日露戦争の日本海海戦観戦中に船内にて発病、ただちに福岡医科大学病院に入院し治療を受けた。そして回復したので八月十五日に博多商業会議所、福岡商工会そして博多実業倶楽部等が主宰して常磐館で快気祝いの黒田侯爵招待会が開催され出席した（『福岡日日新聞』明治三十七年八月十七日二頁）。十一月二十八日の博多商業会議所の総会において、議案等の審議ののち半数の議員の改選がおこなわれ、抽籤の結果、石村虎吉や太田清蔵等一六名とともに議員を退任（『福岡日日新聞』明治三十七年十一月二十九日二頁）。そして改選される半数の選挙が十二月十四日に行われることになり、その選挙公報が十一月三十日に発布され選挙委員に選任された（『福岡日日新聞』明治三十七年十一月三十日二頁）。十二月三日午前には元寇記念碑建設委員会の山田委員長より県庁に招聘される。ほかに松下直美福岡市長をはじめ深澤伊三郎、宮川武行、山口恒太郎、林寛一郎、大隈莊太郎、遠藤甚蔵、渡邊與八郎、石村虎吉、下澤善右衛門、原田善右、八尋孫三郎、杜家間善次郎、立石晋平、許斐儀七、太田清蔵といった福岡経済界の雄たちが集まった。ここで十二月二十五日によいよ東公園に建設中の元寇記念碑（亀山上皇銅像）の除幕式が執行されることになったが、他府県知事や郡市長ら数千人の来賓接待の費用が不足しているというところで、醸金に協力してほしい旨の説明があり、出席した諸氏の賛同が得られた。このあと福岡市役所にて種々協議した結果、市内より予定金額を集めることにし、出席諸氏は委員として斡旋の勞をとることになった（『福岡日日新聞』明治三十七年十二月四日二頁）。十二月十

四日、博多商業會議所議員の半数改選の候補者として推薦されたが、半田寅太郎らとともに補欠となる（『福岡日日新聞』明治三十七年十二月十四日二頁）。

明治三十八年（一九〇五）四月十九日の早晩、近所の「礪野七平鋳造所」から失火。幸い工場の一部を焼いただけで操業に支障はない程度であったが、近所ということで深見鉄工場にも駆け付けて来た人があり、同日の『福岡日日新聞』に「今晩近火ノ節ハ早速御駆付け被下難有奉深謝候取込中尊名伺洩モ多々可有之候間乍略儀以新紙御礼申上候也 三十八年四月十九日 深見平次郎」と礼状を掲載した（『福岡日日新聞』明治三十八年四月二十日三頁）。

このようなことがあったためか、しばらくの間礪野家と疎遠となったが、聖福寺東嬴^{とうえい}老師、山崎藤四郎、太田嘉兵衛諸氏の尽力にて双方の情誼が疎通し、七月九日に常磐館にて和解の懇親会が開催された。列席者は三〇余名、和氣藹々のうちに円満落着となった（『福岡日日新聞』明治三十八年七月十二日四頁）。八月二十一日に福岡市役所楼上にて開催された、聖路易万国博覧会福岡市当業出品協議会の農具の部に礪野七平とともに出席した（『福岡日日新聞』明治三十八年八月二十二日）。さらに同日夜の博多商業會議所総会に出席（『福岡日日新聞』明治三十八年八月二十三日）。

明治三十九年（一九〇六）一月、博多在住の杜家間善次郎、松下榮次郎、末永壽の三氏とともに、学校を参観するなど児童教育に熱心に取り組み、今回は上呉服女子尋常小学校に「日本風景世界人種図」「海軍指教図」など教育上有益な図書数部（価格二〇余円）を寄贈する（福

岡日日新聞」明治三十九年一月二十一日三頁）。三月には満州鉄嶺（現・中華人民共和国遼寧省鉄嶺市）にある商品陳列所に、鋤先や鍋など四三点を出品（『福岡日日新聞』明治三十九年三月二十八日六頁）。第十二回九州沖繩八県聯合共進会（三月十一日～四月二十九日、佐賀市）に出品した農具が二等賞銀牌を受賞（『耕耨耜具』）。新聞記事には「農具の大部分は福岡県の出品で（略）農具は全体に福岡県で發達して居るので鎌、鋏、鋤に至るまで他の各県のそれに比べて一段便利に堅牢に出来て居る」とある（『福岡日日新聞』明治三十九年三月十三日二頁）。四月に入り大阪市戦捷記念博覧会（四月一日～五月三十一日、大阪市天王寺公園）に農具を出品し、名譽銀牌と三等賞を受賞（『耕耨耜具』、『福岡日日新聞』明治四十年七月三十一日二頁）。さらに凱旋記念内国製産品博覧会（四月一日～五月三十一日、京都市岡崎公園）に農具を出品し、有効銀牌を受賞（『耕耨耜具』、『福岡日日新聞』明治三十九年六月十九日）。五月には日韓博覧会（五月十六日～七月二十五日、韓国・釜山）に韓国農業に適した深見式耜先製品を出陳、五月十五日の開場式参列の栄を得て大熊浅次郎とともに関釜連絡船にて釜山に赴いた。公立小学校でおこなわれた式では主催者等の挨拶のあと、大熊浅次郎が博多商業會議所代表として祝辞を述べた。十八日には京釜鉄道にて慶尚南道の中心都市大邱へ日帰りし、韓国の農事開発のため自社農具の販路を普及せんと志し、立石善平とくまなく農業地域を視察した。十九日、広島商業會議所書記長の岡田庄次郎や四日市會議所書記長の久納金吉らと会談し、翌日帰福。三十一日には大熊浅次郎、岡松與八、瀬戸新次郎を招いて宴を催す（大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」）。なお、最終日の

七月二十五日に日韓博覧会褒賞授与式がおこなわれ、出品していた鋤先が金牌を受賞、また唐鋤を出品した磯野七平も金牌を受賞した（『福岡日日新聞』明治三十九年七月三十一日六頁）。大熊浅次郎の『福岡日日新聞』への寄稿記事によると、博多商工会議所の同博覧会への出品奨励に対し、農具の深見、製油の太田、製鹽の許斐が応じた。また深見式鋤先は、将来韓国農業の発展に伴い日本製品の輸出が盛んになれば当地貿易発展の一助になると思って進んで出品したとある（『福岡日日新聞』明治三十九年五月二十六日四頁）。七月一日、東公園において黒田家主催旧福岡藩出身者の出征軍人戦病死者吊魂祭が挙行され、太田清蔵や渡邊與八郎らとともに接待係をつとめる（『福岡日日新聞』明治三十九年六月二十六日）。十一月、旧福岡藩主黒田家の菩提寺である崇福寺（博多区千代）の改築募金に三五円を寄付（『福岡日日新聞』明治三十九年十一月二日三頁）。同月六日、田川郡後藤寺にある定林寺（曹洞宗）の梵鐘を制作し、住職の大園瑞圓師に引き渡した。なお制作費は三〇〇円以上とのこと（『福岡日日新聞』明治三十九年十一月七日）。同月二十九日、福岡市出身で東京や関西で水力電力事業を手がけて成功した野村久一郎が錦衣帰郷したので、常磐館で開催された歓迎会に出席する。発起人代表太田清蔵や藤金作らの歓迎の辞のあと野村久一郎の答辞があり、渡邊與八郎や磯野七平ら地元政財界のトップ四〇人が出席し盛会であった（『福岡日日新聞』明治三十九年十二月一日三頁）。十二月十六日、博多商業会議所議員の半数改選および補欠選挙が行われ、博多有志者一同の推薦を受け河内卯兵衛、井上良助、野村久七郎、奥村吉五郎らとともに立候補する（『福岡日日新聞』明治三十九年十二月十六日二頁）。明治

三十九年度の生産額は、鋤先四二六、七八〇個（価格五一、二〇〇円）、鍋釜二一五、二五〇個（価格五三、七〇〇円）、バケツ八二、五〇〇個（価格二六、〇〇〇円）であった（『福岡市史』第一卷明治篇八二九頁）。明治四十年（一九〇七）三月、東京府勸業博覧会（三月二十日〜七月三十一日、東京上野公園）に農具を出品し、記念三等賞を受賞（『耕耨塾具』、『福岡日日新聞』明治四十年七月二十三日二頁）。四月、第四回五二会全国品評会（四月一日〜五月三十一日、京都市岡崎公園博覧会館）に出品し、有効金牌を受賞（『耕耨塾具』）。出品した各種農具は金牌を、鍋釜類では銀牌を受賞し、さらに両陛下の御用品として御買上の栄に浴す（『耕耨塾具』、『福岡日日新聞』明治四十年七月五日三頁）。五二会とは松方正義を総裁にして京浜間の製産工業に関係した有力者によって構成され、名称は織物、陶器、金属器、漆器、紙の五種と敷物雑貨の二種の発会会合時の参加業種による（『福岡日日新聞』明治三十九年六月一日、明治四十年一月十九日）。五月十二日、福岡日日新聞創刊三十年記念および新社屋竣工式がおこなわれ、そのお祝いに葉書三〇〇枚を寄贈し、さらに余興福引きの景品としてバケツを提供した（『福岡日日新聞』明治四十年五月十二日二頁、六月一日、六月十八日二頁）。満州博覧会（満州（現・中国東北北部）・奉天）に鋤先六五点を出品。この博覧会は東京、京都、大阪、横浜、神戸、名古屋の六商業会議所の協定に基づいて開催されたもので、これ以外の地域からの出品は不許可であった。しかし博多商業会議所はこの六商業会議所の出品協会と粘り強く交渉し、大阪の陳列区域の一間分を得ることができて鋤先農具を陳列した（『福岡日日新聞』明治三十九年十一月十五日三頁）。六月一日、奈良県立農林学校へ実

習用として唐鋤先ほか六二点を寄付。その謝礼として木盃一個が贈られた(奈良県知事正五位勲三等川路利恭よりの謝状 明治四十年六月一日)。八月三十日、故宮崎宮司葦津磯夫の銅像が完成。このあと箱崎放生会の前までに設置等を全部終わらせる計画になっていたが、因みに深見鑄造工場が肖像銅像を鑄造したのはこれが初めてである。そして九月二十一日に職工数十名でもって銅像を台車にのせて宮崎宮へと運搬し、同月二十九日にその竣工式および故葦津磯夫五周年祭が宮崎宮にて挙行された(『福岡日日新聞』明治四十年八月三十一日、九月二十四日、九月二十七日)。葦津磯夫は生前神祇の発展および教育に尽力したのでその功績を顕彰し、枢密顧問官佐々木高行をはじめ各地の神職や農学校出身者等の発起にて銅像建設が計画された。なおこの計画は先年にたてられたものだが三十七八年戦争(日露戦争)により延期されていた(『福岡日日新聞』明治三十九年六月一日、明治四十年五月二十九日)。十一月十五日、遠賀郡水巻村の鉱業家三好徳松により光雲神社(福岡市西公園)へ青銅製鳥居が奉納されることになり、その起工式を深見鑄造工場に行う(『福岡日日新聞』明治四十年十一月十七日)。十一月、京城(現・ソウル)博覧会に農具を出品し二等賞牌を受賞(『耕耘塾具』)。明治四十年度の生産額は、鋤先四四二、七九〇個(価額五三、一〇〇円)、鍋釜二二九、八七〇個(価額五七、五〇〇円)、バケツ一〇八、二〇〇個(価額三五、〇〇〇円)であった(『福岡市史』第一卷明治篇八二九頁)。

明治四十一年(一九〇八)二月、大阪の実業界で大活躍した故大三輪長兵衛の銅像製作を依頼される。大三輪長兵衛は宮崎宮杜家の出身で故葦津磯夫宮司の実兄である。なお遺言で遺産の一部一〇〇〇〇円

を箱崎神苑会箱崎文庫新設に宛てることになり、銅像はその文庫内に設置することになった(『福岡日日新聞』明治四十一年二月十三日)。三月十九日、九州沖縄八県聯合共進会協賛会発起人会が開催され、河内卯兵衛や太田太兵衛らとともに協賛会商議員に選出される(『福岡日日新聞』明治四十一年三月二十一日)。鉱業家三好徳松が依頼していた青銅製大華表が二月に竣工。四月四日に綺麗に着飾った妙齡の都保美会令嬢が、高砂連とともに華表曳行列をなして市中を練り歩き、西公園の光雲神社に奉納した(『福岡日日新聞』明治四十一年二月十五日)。四月、全国特産品博覧会に出品した農具が有効一等賞を受賞、続いて五月には銀賞牌、六月には金賞牌を受賞した(『耕耘塾具』)。十二月、深見鑄物工場に数十年間勤務した職工眞藤平治が、勤続を終え退職することになったので、同氏の功労に酬いるため金四〇円と米二俵そして感謝状を贈与し、さらに同氏の生存中は毎年米三俵宛贈ることにした(『福岡日日新聞』明治四十一年十二月二十五頁)。明治四十一年度の生産額は、鋤先四八八、九七〇個(価額五九、〇〇〇円)、鍋釜二五七、五六〇個(価額六四、五〇〇円)、バケツ一六一、四〇〇個(価額五〇、〇〇〇円)であった(『福岡市史』第一卷明治篇八二九頁)。

明治四十二年(一九〇九)一月十日、博多商業会議所第三十七回総会において、太田勘太郎、立石晋平、大隈壮太郎、中牟田藤兵衛らとともに常議員に選出される。なお会頭は太田清蔵、副会頭は石村虎吉と渡邊渡三郎である(『福岡日日新聞』明治四十二年一月十日)。二月、博多商業会議所書記長の大熊浅次郎が欧米を漫遊するというので、同所は書記長辞任慰労金一五〇〇円を給与し顧問に囑託することにし、

これとは別に福博有志者による送別金の贈呈に賛成し醸金する（『福岡日日新聞』明治四十二年三月一日二頁）。四月、藤公記念共進会に出品した農具が一等賞金牌を受賞（『耕耘塾』）。春に工場に五馬力電動機や径二フィート（約六〇cm）の送風機を設置するなど作業効率向上に尽力（『福岡市史』第一卷明治篇八二八頁）。五月一日、粕屋郡久山町伊野大神宮（天照皇大神宮）大祭のときに、雌雄の鶏を飾った高さ五尺径四尺七寸の青銅製「千人館」銘台を制作し、三度笠股引脚絆の装いをした職工五〇余名が曳いて奉納した。午前九時半に櫛田神社境内に集合し、中洲券番有志寄付の幕及び大神講婦人会寄付の紫縮緬の幕を載せた囃台を先頭に、花籠三挺そして深見鉄工所の銘台等が引き続き、下祇園町から川端筋へ橋口町より掛筋を過ぎ石堂橋箱崎を経て道中歌勇ましく、午後一時頃に大神宮へ練り込んだ。直ちに銘台を新築の千人館前に備え付け、翌二日には定紋入金燈籠一基を寄付し、さらに同工場職工たちも定紋付大茶釜一口を寄付し備え付けた（『福岡日日新聞』明治四十二年五月一日）。同月、久留米市草野町専念寺（浄土宗）の開山持願上人および中興清岸上人の、高さ二丈五尺余の記念碑を鑄造（『福岡日日新聞』明治四十二年五月十日）。同月十三日、聖福寺禪堂で開催された博多聖福寺山門庫裡修築起工式に参列する（『福岡日日新聞』明治四十二年五月十四日五頁）。同月二十九日、福岡市役所にて開かれた、福岡市工芸団体聯合会の朝鮮視察に関する協議会に農具部門から出席。工芸品等の販路拡張のため六月一日から渡韓するにあたっての調査方法などを決議し、釜山地方の実地視察を挙行了した（『福岡日日新聞』明治四十二年五月三十日二頁）。六月、筥崎宮神苑会施設事業の一部として、箱

崎海岸に水族館を建設する発起者に渡邊與八郎、葦津耕次郎らとともになる（『福岡日日新聞』明治四十二年六月十六日）。十一月二十七日、糸島郡波多江村で開催された郡進農会主宰の第一回競犁会に賞品を提供。波多江村の老人（七四歳）が表彰状と深見商店提供の犁押持立鋤一個と郡進農会からの反物一反を受賞した。深見商店は優勝旗五流など一〇〇余点を提供し、磯野商店は鋤先やその他一〇六点を提供した（『福岡日日新聞』明治四十二年十二月一日）。十二月、福岡図書館主の廣瀬玄銀が、来年の九州沖繩聯合共進会開催中に、神代古器物古文書展覧会を図書館で開催することを計画したので、江藤正澄、松田敏足、遠藤甚蔵らとともに協力することにした（『福岡日日新聞』明治四十二年十二月十二日一頁）。同月二十六日、住吉見晴亭にて開催された住吉神社神苑会協議会に出席し、渡邊與八郎らとともに評議員に推される。なお会長は池田穰郡長である（『福岡日日新聞』明治四十二年十二月二十八日）。明治四十三年（一九一〇）二月、西公園の桜樹植栽記念碑を製作。高さは八尺余で表面に「記念櫻」の三字を顕す。費用は一〇〇〇余円で寄付金で賄われた（『福岡日日新聞』明治四十二年十二月十日）。同月、渡邊與八郎が発起人創立委員長をつとめる博多電気軌道株式会社の株式募集に対し、発起人の一人として二〇〇株を引き受ける（『福岡日日新聞』明治四十三年二月十一日）。三月二日、第十三回九州沖繩八県聯合共進会（三月十一日～五月九日、福岡市）の農業館左方に配置する大仏銅像を鑄造し組立に着手する（『福岡日日新聞』明治四十三年三月三日）。なお、同共進会への出品物（金属器）の審査を左仁三郎（福岡）、寺澤徳太郎（熊本）、高原與一（佐賀）らとともにこなす（『福岡日日新聞』

聞』明治四十三年三月八日二頁)。また、福岡市賛助会の訪問係を遠藤甚蔵、河内卯兵衛、太田清蔵らとともに担当する(『福岡日日新聞』明治四十三年三月十日二頁)。同月、共進会にあわせて日本生命保険会社にて開催された古書画展覧会に、所蔵している「雪舟筆瀟湘八景図」と「浦上玉堂筆青緑山水図」を出品(『福岡日日新聞』明治四十三年三月二十七日)。

四月三十日におこなわれた第十三回九州沖縄八県聯合共進会の褒章授与式で、農業機械器具部門に出品した馬耕鋤先が一等賞金牌を、金属器部門の鍋釜銅器が二等賞銀盃をそれぞれ受賞(『福岡日日新聞』明治四十三年五月二日一頁)。なお、磯野七平も農業機械器具部門で一等を(『福岡日日新聞』明治四十三年五月一日二頁)、金属器部門で二等をそれぞれ受賞している(『福岡日日新聞』明治四十三年五月二日四頁)。五月七日、渡邊與八郎、太田清蔵、下澤善右衛門、遠藤、原、大野仁平らと發起して、過日の市会議員過半数改選に際し、従来対立していた三派を妥協させて候補者選定による無競争となるよう斡旋する(『福岡日日新聞』明治四十三年五月九日二頁)。六月、藤金作、渡邊與八郎、野村久一郎、遠藤甚蔵、下澤善右衛門、太田勘太郎、石橋源次郎、藤野良造、関運七、堺虎之助、長野嘉平、長尾丈七らとともに、東公園に新劇場博多座を建設する発起人になる(『福岡日日新聞』明治四十三年六月十八日五頁)。同月二十六日、以前福岡煙草製造所長のときに製造所拡張問題などで地元経済界と親交があった、金沢煙草製造所長の田村周造が帰福したので、常盤館で歓迎会を開くように渡邊與八郎、太田清蔵、進藤喜平太、原三信、藤金作、大野仁平、渡邊渡三郎、野村久一郎、遠藤甚蔵、下澤善右衛門、平岡良助らとともに発起人のひとりとなる(『福岡日日新聞』

聞』明治四十三年六月二十五日一頁)。七月五日、博多仁和加畳屋組が博多明治座にて公演するにあたって、畳屋組が第十三回九州沖縄八県聯合共進会の演芸部門で一等賞を受賞したのを祝して、磯野七平、太田大次郎、太田勘太郎、吉田、松井、小林らとともに博多織緞帳一張を寄贈する(『福岡日日新聞』明治四十三年七月七日五頁)。同月十三日、東公園にある日蓮上人銅像建設に尽瘁した日蓮宗の佐野前助師が宗務総監に昇任したので、その祝賀会を常盤館で開催するにあたって、石村虎吉、石松昇一、藤金作、渡邊與八郎、太田清蔵、奥村七郎、山口恒太郎、深澤伊三郎、遠藤甚蔵、葦津耕次郎、佐藤平太郎、下澤善右衛門、新藤喜平太、広瀬玄銀らとともに発起人になる(『福岡日日新聞』明治四十三年七月十二日一頁)。同月十七日、博多観大講中の篠田房次郎および同世話人の山本莊太郎両氏らの奔走尽力により発注された銅造出山釈迦像を鑄造、糟屋郡篠栗村の遍照院に安置された。これに先立ち前日に釈迦像を台車に乗せて博多各町を曳き廻って信者の礼拝を受け、十七日は早朝より観大講者、世話人信者とともに深見鑄造所の店員あわせて約五〇〇人が、釈迦像が乗った牛車を引いて吉塚を経由して遍照院に向かった(『福岡日日新聞』明治四十三年七月二十五日)。八月三日、嘉穂郡飯塚町金比羅山頂に建立する日露戦役記念碑を磯野鑄造所とともに制作し除幕式に出席。同碑は十五尺四方高さ八尺四寸の石垣に、高さ一丈二尺径二尺一寸二分の碑を立てたもので、碑には奥保鞆陸軍大將が揮毫した文字が刻されている(『福岡日日新聞』明治四十三年八月六日)。十一月、第三回全国特産品博覧会に出品した農具が有効賞金牌を受賞(『耕耘犁具』)。

明治四十四年（一九一二）、二月、嘉義台南阿緱^{あゐ}三庁農会主催の第一回台湾南部物産共進会へ、参考品として唐鋤先ほか三三点を出品したのでその感謝状が贈られた（第一回台湾南部物産共進会長松木茂俊よりの感謝状 明治四十四年二月二十一日）。四月、福岡県製産品評会に出品した農具が一等賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。五月十日、博多高砂連の供養塔として聖福寺境内に高砂爺媼の銅像建設計画が発起されたが、原型制作者間で意見が分かれた。そこで鑄造を担当する平次郎が制作者の博多人形師三名を自宅に招き協議した結果、爺像は白水六三郎と前崎友吉、媼像は中ノ子一家が分担してそれぞれ原型を制作することになった（『福岡日日新聞』明治四十四年五月十二日）。五月、京都博覧協会創立四十周年記念全国製産品博覧会に農具を出品し記念状が贈られた（「耕耘犁具」）。九月二十七日、全国的組織の財団法人済生会設立にあたって義金一〇〇〇円を寄付する。同額は下澤善右衛門、豊田喜三、平岡良助、河原田平助、原倉次郎で、渡邊與八郎の金一〇〇〇〇円を最高に野村久次が金七〇〇〇円、渡邊與三郎が金五〇〇〇円、太田清蔵が金三〇〇〇円、磯野七平が金一三七〇円などで福岡市の総額は金三七、六九一円だった（『福岡日日新聞』明治四十四年九月二十八日三頁）。九月三十日、博多商業会議所内にて開催された九州印刷会社設立総会で監査役に選出される。ほかに監査役は古林與六と三嶋藤太。相談役は渡邊與八郎、谷彦一、許斐儀七、榎本與七郎、野村久一郎、村上芳太郎。取締役は宮原六三郎、青木真五郎、馬場義勝、渡邊龍次郎、真鍋道彦、宮川武行、徳永勲美。創立委員長の宮川武行が議長に選出された（『福岡日日新聞』明治四十四年十月三日五頁）。十一月、陸軍特別大演

習のため久留米へ行幸中の天皇陛下に天覧の栄を賜う（「耕耘犁具」）。この年の後半に博多東長寺住職摩尼寶洲師の寿像を制作。明治の初年ころ師が博多大乗寺の住職だったとき、付近に小学校がなかったので寺内にて読書手習いの授業を実施し、小学校の濫觴といわれた。旧門生の中原大三郎や河原田の発起により寿像を制作し東長寺境内の六角堂の後方に設置することにした。ところが公地に私人の銅像を建立してはいけなとの県当局者の意見があり、銅像は頭部は頬被りし全身に包帯がまかれ、除幕式は延期された（『福岡日日新聞』明治四十四年三月十二日）。

明治四十五年（一九一二）二月、出雲大社参拝遊覧団を遠藤甚蔵、下澤善右衛門、三苦寛一郎、野村久七郎等と計画し、事務所を福岡通町出雲大社教分院内に設置した。この遊覧団は会員三〇〇人で、四月二十日に博多駅を出発し、開通間もない山陰鉄道を通って出雲大社大祭、京都本願寺親鸞聖人六五〇回大遠忌、讃岐琴平宮三〇〇年祭などを観光するもので、二等ボギー特別列車を使用して費用二八円五〇銭の十二日間の旅行であった（『福岡日日新聞』明治四十五年二月二十九日七頁）。三月、博多高砂連によって発起された供養塔が聖福寺境内に竣功（『福岡日日新聞』明治四十五年三月二十二日）。六月、この頃鍋釜鋤先鑄造元深見平次郎本店および金物卸商深見平次郎支店の名義を語って、専売特許ランプ口金補助器などの物品を販売勧誘する者があらわれた。そこで弊社とは一切関係ない旨の広告を福岡日日新聞に緊急広告を載せた（『福岡日日新聞』明治四十五年六月六日八頁）。同月頃、久留米藩の勤王真木和泉守保臣銅像が制作されるにあたって、独自の銅像模型

をつくって真木保臣顕彰会に提案するが、すでに東京の案に決っていた。東京の故実研究家が考案したのは、小具足のうえに陣羽織を被り太刀を佩き右手に采配を握って腰部に持たせた直立正視の姿勢であつた（『福岡日日新聞』明治四十五年六月五日）。

大正元年（一九一二）六月、山陰鉄道開通記念全国特産品博覧会（鳥取・米子）に出品した農具が進歩金賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。十一月、第九回福岡市工芸品評会に出品した農具が二等賞銀牌を受賞（『耕耘犁具』）。

大正二年（一九一三）十月、第八回全国特産品博覧会に出品した農具が功勞金牌を受賞（『耕耘犁具』）。

大正三年（一九一四）四月、久留米市の水天宮七百年祭記念勸業共進会（四月二十六日～五月三十一日）に出品した農具が一等賞金牌を受賞（『耕耘犁具』）。十月二日、博多湾築港運動のために上京して杉山茂丸宅を訪問、次いで早稲田の大隈重信首相の私邸に行き、築港許可を詮議するよう陳情する（大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」）。

大正四年（一九一五）四月、九州沖繩勸業共進会に出品した農具が一等賞金牌を受賞（『耕耘犁具』）。六月、西公園の平野國臣銅像を鑄造。原型を制作したのは国臣の甥で東京美術学校出身の彫刻家田中助太郎（雪窓）。国臣の写真がなかったので親戚や知人諸氏の意見を参考に、美術学校教授高村光雲の監督下にて原型を制作した。像高は一丈二尺にして髪は茶筌髪、羽織は着ないで短袴にて腰には大小をさし、左手には扇を持ち脚絆草鞋の軽装にて諸国遊説の凛々しき雄姿とする。台座は花崗岩にて高さ一丈三尺、側面には黒田長成の筆にて「平野國臣」

と楷書で書くように依頼した。鑄造経費は金三〇〇〇円で重量五〇〇〇斤の鑄造を深見鑄工場がおこない、台座および基礎工事は経費金三七〇〇円にて岩崎組（現・岩崎建設）が請け負った。これらの設計は筑前出身で前宮内省海軍省技師工学士の宗兵蔵が担当し、周囲には鉄鎖をめぐらした。経費予想は約金二〇〇〇〇円で、その寄付金割り当ては福岡市が金五〇〇〇円、郡部が金六三〇〇円（一郡あたり金七〇〇円平均）、炭坑家が金三五〇〇円、東京市が金五〇〇〇円の合計金一九八〇〇円となる。除幕式は十月二十日であつた（『福岡日日新聞』大正四年九月二十五日五頁）。十月、御大典記念全国特産品共進会に出品した農具が名誉賞金牌を受賞（『耕耘犁具』）。十一月、始政五年記念朝鮮物産共進会（九月十一日～十月三十一日、京城・景福宮）に農具を出品し感謝状が贈られる（『耕耘犁具』）。

大正五年（一九一六）十一月、福岡佐賀両県で開催される陸軍特別大演習（十一月十一日～十四日）に際し、福岡へ臨幸する天皇陛下に福岡市役所を経由して犁を献納。磯野七平は鋤先を献納している（『福岡日日新聞』大正五年十一月七日二頁）。行幸中の天皇陛下に天覧の榮に浴す（『耕耘犁具』）。

大正六年（一九一七）二月、糟屋郡篠栗町新四国有志によって組織された弘勤勧善友講会が発起して、弘法大師と不動明王、観音菩薩の各銅像を建立することになり、そのうちの高さ一丈八尺で重量一〇〇〇〇斤の弘法大師銅像を鑄造竣工する（『福岡日日新聞』大正六年二月二十四日）。五月、維新五十年記念博覧会に出品した農具が進歩一等賞を受賞（『耕耘犁具』）。

大正七年（一九一八）三月、合名会社博多鑄造所を設立。一部の工場を博多駅の南の明治町に新設し機械類を鑄造（『深見平次郎君』『大福岡今昔人物誌』）。四月、福岡県実業団体聯合会主催九州沖縄物産共進会（四月十日～五月九日、須崎裏）に出品した農具が一等賞を受賞（『耕耘犁具』）。七月二十六日、大熊浅次郎より筑紫史談会主催史料展覧会への出陳依頼の相談があつて、翌二十七日に史料展覧会へ出陳目録を提出。九月二十五日、大熊浅次郎を訪問し、課税問題解消のために会社組織にすることを相談する。十一月十八日、大熊浅次郎に駐車場付近の土地処分問題を相談。二十二日、大熊浅次郎に土地の件で面会する（大熊浅次郎日誌『深見本家第十一代当主事跡』）。八月、第三回帝国勸業共進会に出品した農具が進歩一等賞を受賞（『耕耘犁具』）。十月三十一日、甘木町金比羅公園に建設された日清日露戦役記念碑の除幕式に出席。高さ一丈四尺の石製台座のうえに立つ高さ一丈の兵士銅像を鑄造（『福岡日日新聞』大正七年十月三十一日、十一月二日）。十月、第二十三回全国特産品博覧会に出品した農具が名誉金賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。大正八年（一九一九）三月三十一日、事業の拡張に伴い営業の組織を合名会社に変更。社名を「合名会社深見商店鑄造所」と改称（『沿革』深見製銅所 昭和四十一年カ、『犁界の先駆（ヤマニ）印 深見式深耕犁』深見商店農具部）。六月、深見鐵工場の忠勤店員であつた八女郡出身の故西村千之を追悼するため、墓碑建設費を引き受けて自家鑄造の銅材を配合して建設することにした（『福岡日日新聞』大正八年六月二十一日七頁）。

大正九年（一九二〇）五月、福岡工業大博覧会（三月二十日～五月十日、須崎裏や西公園下）に出品した農具が一等賞金牌を受賞（『耕耘

犁具』）。七月九日、大熊浅次郎に杉山茂丸への暑中見舞いの贈答品に關して電話で相談する。二十二日、東京の杉山茂丸へ大熊浅次郎、遠藤甚藏、百沢そして平次郎の四氏連名で葛素麵を贈る。十月八日、大分県日田町専念寺（真宗大谷派）の五岳上人銅像を鑄造、その除幕式がおこなわれた。像高八尺にして基台高五尺、石製台座高一丈。経費は一〇〇〇〇円である（『福岡日日新聞』大正十年九月十四日二頁）。

大正十年（一九二一）四月、第十四回九州沖縄八県聯合共進会（三月十五日～五月十三日、大分市）に出品した農具が一等賞金牌を受賞（『耕耘犁具』）。同月、宮内省より御買上の栄を蒙る（『耕耘犁具』）。七月二十一日、明春開催予定の黒田長政公三百年祭について、福岡市浜の町黒田家別邸に於いておこなわれた有志協議会に出席。ほかに安河内麻吉県知事、久世庸夫市長、福岡日日新聞と九州日報それと福岡毎日新聞の三新聞社長、濱田市会議長、武谷水城県教育会長、進藤喜平太、太田清藏、渡邊與三郎らが出席。奉賛会を組織することに決し、会長に安河内知事、副会長に久世市長などが決定した（『福岡日日新聞』大正十年七月二十二日二頁）。九月、福岡県嘉穂郡鎮西村出身の岸田牛五郎の銅像除幕式がおこなわれる（『福岡日日新聞』大正十年九月二十五日二頁）。

大正十一年（一九二二）四月六日、福岡県主催全国改良農具展覧会の授賞式が福岡県三農事試験場内で挙行され、第一類の耕種に関する器具機械部門に出品した犁および犁先が金牌を受賞。同業の磯野七平も犁で金牌を受賞している（『耕耘犁具』、『福岡日日新聞』大正十一年四月七日七頁）。七月、ワシントン条約を記念した平和記念東京博覧会（三月十日～七月三十一日、東京・上野公園不忍池畔）に出品した農具が

名誉金牌を受賞（「耕耘犁具」）。同月、福島県全国改良農具共進会に出品した農具が優等金牌を受賞（「耕耘犁具」）。八月、佐賀県改良農具展覧会に農具を出品し一等賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。

大正十二年（一九二三）四月、大坂府主催全国改良農具展覧会に出品した農具が名誉金牌を受賞（「耕耘犁具」）。六月二日、長男邦太郎が逝去し、五日に川口町妙行寺にて葬儀を挙行した（「福岡日日新聞」大正十二年六月三日七頁）。葬儀にはたいへん多くの参列者が臨席し近年稀に見る盛葬であった（「福岡日日新聞」大正十二年六月六日七頁）。六月に大分県宇佐郡宇佐八幡宮境内接続地に建設された南みなみしやう尚銅像を鑄造。南尚は地元の広瀬井堰はじめ全国の水利土木事業に貢献した人物で、像高は一丈、石製台座高は一丈二尺。工費は六七九四円（北澤憲昭総監修田中修二監修 シリーズ・近代日本のモニュメント1『銅像写真集 偉人の俤』（図版篇）二四四頁 ゆまに書房 二〇〇九年）。

九月、山形県主催改良農具展覧会に出品した農具が優等賞を受賞（「耕耘犁具」）。十月、第五回九州聯合畜産共進会に出品した農具が一等賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。十一月頃、福岡市通俗博物館で開催された古今文房具展覧会に秘蔵の高取焼硯屏を出品（「福岡日日新聞」大正十二年十一月七日三頁）。同月頃、博多全町の氏神である県社櫛田神社の二十五年目ごとにおこなわれる遷座式が来年四月に執行されるにあたって、氏子総代遷座行列委員として行列順担当取締となつて、大神宮前備十二番より二十五番までを原惣兵衛、吉貝甚石衛門、高柳亀吉、富永平八郎、山崎清十郎らとともに担当する。というのも最近の隣接町村合併による博多部市域が拡張し氏子の数がふえたので、今まで一

番から十三番まででおこなっていた行列が二十番以上まで増加していた（「福岡日日新聞」大正十二年十一月十日二頁）。この年、時勢に従い益々農機具の改良研究に努めるため、社内に「動力機械農具部」を設置し、農村の機械化の機運を促進した。全国の優良動力農機具の九州一手販売権を得て、深見農具の名声を博する（「沿革」、『深見式最新式耕耘犁具』深見商店鑄造所）。

大正十三年（一九二四）三月、香川県農会主催全国改良農具展覧会に出品した農具が金牌を受賞（「耕耘犁具」）。四月、愛知県農会主催全国改良農具共進会に出品した農具が名誉金牌を受賞（「耕耘犁具」）。香川県農会に於いて、深見式犁の日光号と豊光号が金牌を受賞（香川県知事從四位勲三等中川健藏よりの賞状 大正十三年三月二十四日）。

大正十四年（一九二五）五月、全国選拔農具展覧会に出品した農具が名誉大賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。同月、熊本市三大事業記念国産共進会（三月二十日～五月三日、第二十三聯隊跡地）に出品した農具が名誉賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。八月、大連市市制十周年記念大連勸業博覧会（八月十日～九月十八日、上海西公園・電気遊園下）に出品した農具が名誉金牌を受賞（「耕耘犁具」）。十一月、東京府主催農林省後援全国改良農具共進会に出品した農具が名誉賞牌を受賞（「耕耘犁具」）。十二月二十七日午後二時、平次郎の母堂ナツエ刀自が病氣療養中のところ逝去、二十九日に川口町妙行寺にて葬儀（「福岡日日新聞」大正十四年十二月二十八日三頁）。

大正十五年（一九二六）一月、全国実演農具共進会に農具を出品し、特別賞金牌を受賞（「耕耘犁具」）。同月、福岡市の発展に大いに貢献し

た故渡邊與八郎氏の銅像を建設しようと、頭山満や団琢磨らとともに發起人になり、さらに石橋愛太郎を銅像建設委員長にして、遠藤甚蔵や大熊浅次郎らとともに相談役になる。銅像の原型製作は郷土出身の彫刻家山崎朝雲に依頼するが、試作の頭部のみがつくられて銅像建立は中止された（渡邊與八郎氏銅像建設趣意書）。四月四日、二男平一郎が浮羽郡吉井町中川信行妹松代子と婚儀。七日に博多金吉料亭にて市内の知名諸氏約五〇名を招いて披露宴をおこなう（『福岡日日新聞』大正十五年四月八日三頁）。五月二十三日から五日までの三日間、福岡日日新聞社楼上（第二会場は麴屋町奥村雜貨店階上）に於いて開催された、博風会主催福岡日日新聞社後援の筑前故人筆蹟展に所蔵している村田東圃筆「着色闔家全慶」、同「淡彩秋冬山水」、同木父賛「春牛 蓮二蜂」、野村望東尼筆「和歌二行」、桑原鳳井筆仙厓賛「淡彩大原女」、亀井少菴筆「墨竹画賛」、平野国臣筆「春風解氷和歌二行」、齋藤秋圃筆「着色宮姫聴鶯」、貝原益軒筆「細字額」、曇榮筆「鉄拐仙人」、亀井南冥筆長巻「都府樓碑文」、中西耕石筆「牡丹猫」を出品した（筑前故人筆蹟展出品目録）。七月三日、福岡鉄工業同業組合第五回優良職工表彰式ならびに第三回徒弟見習い卒業式が博多商業会議所で開催され、表彰職工に深見鉄工所の内田豊吉が選出され、渡邊組合長より褒賞が授与された（『福岡日日新聞』大正十五年七月四日七頁）。十月、大分県主催農林省後援の全国改良農具共進会に農具を出品し、名誉賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。同月、帝国発明協会へ出品した農具が有功賞を受賞（『耕耘犁具』）。

昭和二年（一九二七）二月二日、大熊浅次郎とともに故大正天皇の

大葬儀を拝観するため上京。翌日東京に着くと杉山茂丸に面会。頭山満が節分の夜に浴室にて大怪我をしたということで病院に見舞いに行く。黒龍会奉葬場に行くが時間制限により入れず。途中乃木坂通にて奉送軍隊が引き上げるのを見物し、新宿御苑の大葬場を拝観した（大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」）。五月、東亜勸業博覧会（三月二十五日～五月二十三日、大濠公園一帯）に農具を出品し、開催に尽力したというので功労賞および感謝状が贈られる（『耕耘犁具』）。同月、帝国発明協会より特等賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。六月十二日、平次郎への実業功労賞授与の詮議申請のため上京し杉山茂丸邸に投宿。翌日海軍大臣八代六郎大將を訪問。別の日に葦津珍彦とともに山本悌二郎農相を官邸に訪問するが不在だったので、秘書官に詮議申請の伝達を依頼する（大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」）。六月二十一日に大熊浅次郎が葦津珍彦とともに、杉山茂丸からの紹介依頼状をもつて、山本農相に逢おうとするが閣議のため見合わせる。翌日から富士見町の農相官舎に訪れたり電話するが多忙のため連絡がつかず。二十四日に農相官舎に行くがまたしても面会がかわらず、竹田徳太郎秘書官に博多深見平次郎実業功労賞下賜申請書をわたす。これはかつて地方長官から商工省に提出されたが、詮議ののち農林省へ回付されたことがあったので、是非農林省で詮議するよう懇願した（大熊浅次郎「上京日誌」抜粋）。この頃、山形県主催農林省後援の全国改良農具共進会に農具を出品し名誉賞牌を受賞（『耕耘犁具』）。香川県農会主催の丸亀市全国改良農具共進会に農具を出品し名誉金牌を受賞（『耕耘犁具』）。十月、実業に精励し農具の改良普及に尽瘁したとして緑綬褒章を受章し

た(『耕耘犁具』、『沿革』)。

昭和三年(一九二八)六月五日、昭和天皇即位礼にあたつての大嘗祭に使用する新穀を収穫するため、早良郡脇山の主基斎田の御田植え祭に「御用深見犁」が使用される(「犁具の先駆(ヤマニ) 印 深見式深耕犁」)。七月、最新式電気炉を新設し鑄造製品の精密化を図る(「沿革」)。

この年、宮崎県における第三回改良農具実演会へ農具を出品(宮崎県農事試験場長正六位新倉晴光よりの感謝状 昭和三年十月二十九日)。

昭和四年(一九二九)四月十一日から十五日の五日間、福岡県主基地方勅定記念会主催の改良農具実演会に最新改良農具を出品(福岡県主基地方勅定紀年会および福岡県宗像郡農会より深見商店への感謝状 昭和四年四月十六日)。十月、岡山県主催農林省後援の全国農具共進会に出品した農具が名誉賞牌を受賞(「耕耘犁具」)。十一月、京城府主催の朝鮮博覧会に出品し、功労賞牌および記念感謝状を受賞(「耕耘犁具」)。十二月二十六日、隠居して家督を二男(十二代)に譲る(「改製原戸籍」)。

昭和五年(一九三〇)七月一日、平次郎とともに福岡市の政治経済界の元老の立場にいた遠藤甚蔵の窮状救済のために上京し、六日に相模葉山の金子堅太郎を訪問し、遠藤家救済について相談する。その際に遠藤甚蔵所蔵の蒙古兜の処分を依頼する。このほか金子堅太郎の口利きで岩永執事の案内で葉山御用邸内を拝観したり、逗子葉山にて静養中の元福岡日日新聞編集主幹兼主筆の高橋光威を見舞ったりした。九日、上京してきた遠藤を伴って金子堅太郎を訪問し改めて遠藤から懇請する。他日、遠藤を同道して頭山満と太田清蔵、さらに原宿の団琢磨を訪問。帰途、大阪に寄って遊覧船に乗って港内を視察したり、

宝塚少女歌劇を見学して離阪する(大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」)。十一月十七日、再び遠藤家救済のため上京し、金子堅太郎に先般来より依頼している遠藤救済問題整理案調書を提出。所蔵せる蒙古兜などの骨董品の処分を懇請する。さらに金子堅太郎の指示で団琢磨の三井合名会社を訪問するが、蒙古兜の処分など遠藤救済問題を引き受けるのは難しいとのことであつた。他日、青山斎場にて全国質屋聯合の故森安三郎会長の葬儀に出席。福岡県質屋聯合会会長でもある遠藤が焼香拝礼した。他日、内田良平宅を訪問し骨董品処分について相談したところ、関屋宮内次官を紹介されるが、関屋次官の都合がつかず内田に委任して帰福する(大熊浅次郎日誌「深見本家第十二代当主事跡」)。

昭和十年(一九三五)八月二十一日、病臥のところを大熊浅次郎が見舞いに来る(大熊浅次郎日誌「深見本家第十一代当主事跡」)。九月二十九日に逝去(「改製原戸籍」)、享年七十七歳。

● 深見浅次郎(下厨子町)

明治元年(一八六八)創業の博多下厨子町の深見工場を経営。鉄および銅器具を主に生産した(「福岡市史」第二卷大正編七〇四頁)。

● 深見孫三郎直次(厨子町)

明治十八年(一八八五)十月、佐賀県西松浦郡有田町陶山神社の青銅製狛犬を制作。狛犬背面の陰刻銘文に「福岡県筑前国博多厨子町住／铸造人 深見孫三郎直次／同 深見孫平直満／次工 大野正助直



陶山神社狛犬（佐賀県有田町）



陶山神社狛犬 銘

銅製狛犬を制作。

明治二十五年（一八九二）二月、

博多厨子町渡邊藤吉支店と連名で、
出火のさいに駆けつけてくれた人々
へのお礼を新聞に掲載（福岡日日新
聞）明治二十五年二月六日。

明治三十五年（一九〇二）三月、

筑紫郡千代村（現・福岡市博多区千
代）崇福寺（臨済宗大徳寺派）の銅

久」とあり、石製台座に陰刻で「明治十八年／酉十月吉日」「本幸平
町」とある。像高一八〇cm。

明治二十三年（一八九〇）、博多在住の仏師高田又四郎良慶のもと
での修行を終え、独立したばかりの木彫家山崎春吉（のち上京して高
村光雲に師事して朝雲と名乗る）が木造彩色像「深見孫三郎肖像」（六
七歳の寿像）を制作している（拙著 福岡市美術館叢書1『山崎朝雲資料集』
五四八頁 葦書房 一九八七年）。

●深見孫平直満（下厨子町）

安政五年（一八五八）、宗像郡福岡町（現・福津市）某神社の銅製
鈴を制作。陽鑄銘「安政五年／午年中」と陰刻銘「鑄工厨子町／深見
孫平」がある。総高三三・〇cm、胴径三一・八cm（福岡町史 資料編二
美術・建築・民俗 七一頁 福岡町 一九九八年）。

明治十八年（一八八五）十月、佐賀県西松浦郡有田町陶山神社の青

製角香炉を制作。底に陰刻銘「明治三十五年三月／博多厨子町鑄冶／
深見孫平造之」がある（福岡市文化財調査目録4『崇福寺収蔵品目録』福岡
市教育委員会 一九九〇年）。

明治三十六年（一九〇三）七月一日、大阪で開催された第五回内国
勸業博覧会に犂先を出品し褒状を受賞（『福岡日日新聞』明治三十六年七月
五日）。

●深見孫助（厨子町）

明治三十二年（一八九九）十月、博多金屋小路の上田勘三郎と西門
町の白木一平の兩人が発起となり、国家安穩祈願のため嘉穂郡内野村
大根地神社へ奉納する青銅製馬（高さ三尺）を鑄造する。なお奉納す
る前に福岡在住の信者に縦覧するため市中を曳き廻した（『福岡日日新
聞』明治三十二年十月二十七日、二十九日）。

●深見清太郎（大浜町一丁目一〇七番地）

明治十七年（一八八四）二月十六日生まれ。鋳物業に従事（小島康雄『第四七二三号 鋳物同業組合規約公正証書謄本』一九三一年）。

大正元年（一九一二）十二月、深見機械鋳物工場（大浜町一丁目一〇七番地）を創立。主に鋳山用機械や鋳鉄管を生産し福岡市内や若松、長崎方面に供給していた（『福岡市史』第二卷大正編七〇八頁）。

昭和六年（一九三一）、福岡鋳物同業組合の理事に選出される。組長は今村梅太郎で、理事はほかに相葉徳三郎、一木徹一、深見喜七、深見勝次郎、高尾平次郎、中川市平が選挙で当選した（小島康雄『第四七二三号 鋳物同業組合規約公正証書謄本』）。

●深見勝次郎（下厨子町一番地）

明治十七年（一八八四）四月二十三日生まれ。鋳物業に従事（小島康雄『第四七二三号 鋳物同業組合規約公正証書謄本』）。

昭和六年（一九三一）、福岡鋳物同業組合の理事に選出される（同）。昭和八年（一九三三）九月、三井郡山本村柳坂（現・久留米市山本町豊田）永勝寺（曹洞宗）に梵鐘（高さ一尺）を納入（古屋敏久『和鉄の心今に伝えて』私家版 一九九四年）。

昭和十三年（一九三八）、三井郡山本村（現・久留米市山本町耳納）観興寺（曹洞宗）に梵鐘（高さ二尺）を納入（同）。

昭和二十三年（一九四八）三月、熊本県飽託郡西里村字桑鶴の正徳寺に梵鐘（高さ二尺一寸）を納入（同）。九月、筑紫郡南畑村字南面里（現・那珂川市大字南面里）正応寺（浄土真宗本願寺派）に梵鐘（高

さ二尺）を納入（同）。

昭和二十四年（一九四九）七月、八女郡中広川村（同郡広川町大字新代）西念寺（真宗大谷派）に梵鐘（高さ二尺）を納入（同）。十二月、福岡市西林寺町（現・福岡市博多区吉塚）西林寺（浄土真宗本願寺派）に梵鐘（高さ二尺四寸）を納入（同）。

昭和二十五年（一九五〇）四月、糸島郡一貴山村字松国（現・糸島市二丈松国）明光寺（浄土真宗本願寺派）に梵鐘（高さ二尺三寸）を納入（同）。六月、福井県遠敷郡宮川村（現・福井県小浜市加茂）長泉寺（曹洞宗）に梵鐘（高さ二尺一寸）を納入（同）。

昭和二十六年（一九五一）三月、糸島郡元岡村字田尻（現・福岡市西区田尻）長善寺（臨済宗大徳寺派）の梵鐘（高さ二尺一寸）を納入（同）。

昭和二十九年（一九五四）五月、福岡市姪浜町（現・福岡市西区姪浜）興徳寺（臨済宗大徳寺派）の梵鐘（高さ二尺三寸）を納入（同）。この梵鐘の中子（鋳物の内部中空部をつくる鋳型）は博多独特の「継ぎ中子法」が使われている（福岡教育大学名誉教授遠藤喜代志氏よりご教示）。

勝次郎の子息は礼次郎といい、さらに礼次郎の子息恭治が福岡市博多区吉塚に深見鋳造所を経営していたがのち古賀市に移転した。また勝次郎の娘婿である古屋敏久は古屋鋳造所（現・エフキャスト）を創業している（福岡教育大学名誉教授遠藤喜代志氏よりご教示）。

●深見與四郎（下厨子町一番地）

明治二十八年（一八九五）九月十六日生まれ。鋳物業に従事（小島康雄『第四七二三号 鋳物同業組合規約公正証書謄本』）。

●深見喜七（上厨子町五番地）

明治二十九年（一八九六）六月十四日生まれ。鋳物業に従事（小島康雄『第四七二三号 鋳物同業組合規約公正証書謄本』）。

昭和六年（一九三一）、福岡鋳物同業組合の理事に選出される（同）。

●深見朝太郎

明治四十三年（一九一〇）四月三十日におこなわれた第十三回九州沖縄八県聯合共進会の褒章授与式で、金属品部門四等を受賞（『福岡日日新聞』明治四十三年五月二十二日三頁）。

●深見久七

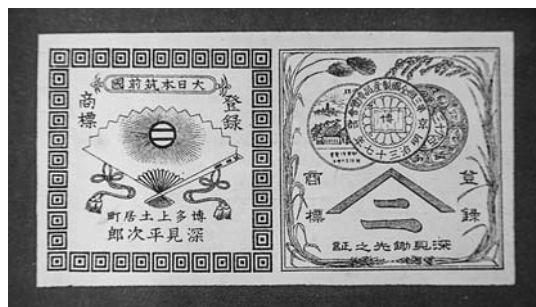
明治四十一年（一九〇八）八月十二日、博多大浜三丁目の直方屋において開催された福岡地方車輪鍛冶組合の臨時総会で組長に選出される（『福岡日日新聞』明治四十一年八月十二日）。

●深見邦太郎（上土居町）

明治十七年（一八八四）七月一〇日、興盛とツルの長男として生まれる（『改製原戸籍』）。



深見鋤先ポスター
（福岡市博物館蔵）



深見鋤先ポスター（部分）

●深見平次郎（十二代）

大正十年（一九二一）五月四日、第十四回九州沖縄八県聯合共進会（三月十五日～五月十三日、大分市）に農具を出品していたので大分に出張していたところに、平次郎（十一代）より農具擬賞の件で電話を受けた大熊浅次郎が、徳永勲美と大分市へ出張して来たので会う（大熊浅次郎手記「出張日記抄録」『深見本家古文書 第十一号』）。

大正十二年（一九二三）六月二日逝去、享年四十歳（『改製原戸籍』）。

明治三十四年（一九〇一）十一月十九日、福岡市上土居町九番地（現・博多区冷泉町五百三十二番地）にて、興盛とツルの二男として生まれる。幼名は平一郎。明治三十七年五月二十三日に福岡市上土居町二十九番地の内山荒太郎の養子となるが、同年六月二日に協議離縁して復籍（改製原戸籍）。呉服尋常小学校そして中学修猷館を卒業（妙行寺から深

見御母堂様宛手紙裏メモ)。そして寛文三年(一六六三)創業の深見鑄造所(福岡市上土居町)を経営し、鋤先や鍋釜などを生産する。

大正十三年(一九二四)三月、明治大学商科を卒業。四月、合名会社深見製鋼所へ入社する。同年十二月から翌年十一月までの一年間、志願兵となる(妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ)。

大正十五年(一九二六)八月二十四日、浮羽郡吉井町の中川正信とツ子ヨの三女松代と結婚(改製原戸籍)。松代の祖父でツ子ヨの父である田中新吾(一八四九―一九二一)は、筑後地区の農業発展に貢献した人物で、その胸像が味坂小学校(小郡市八坂)の校庭に建てられている。この胸像の作者は久留米出身の鑄金家豊田勝秋(一八九七―一九七二)で、深見鑄造所で制作されている。

昭和四年(一九二九)十二月二十六日、先代平次郎の隠居により家督を相続する(改製原戸籍)。

昭和五年(一九三〇)四月、合名会社深見製鋼所代表社長となる。

昭和六年(一九三一)、三月、茨城県主催農林省後援の全国農具共進会に出品した農具が名誉賞牌を受賞(「耕耘犁具」、大日本農会主催の第四回畜力利用講習会へ深見犁を貸与する(大日本農会副会頭正四位伯爵堀田正恒より深見商店への感謝状 昭和六年四月十五日)。

昭和八年(一九三三)八月、山口県主催全国農具展覧会へ特日光号犁(開閉ヘラ付)を出品し金牌を受賞(山口県知事正五位勲四等菊山嘉男よりの賞状 昭和八年八月二十九日)。十一月二十四日、築上郡農会より改良犁の普及および犁耕法の習熟による農産物生産の増加、および農村不況の更生に大いに貢献したということで感謝状が授与される(築上

郡農会長平塚又太郎よりの感謝状 昭和八年十一月二十四日)。

昭和九年(一九三四)十月、農具の改良普及に尽くしたということで緑綬褒章を受章(「深見式最新式耕耘犁具」)。同年、兵庫県主催の全国農具共進会へ「深見式碎土器」を出品し銅牌を受賞。審査長は農事試験場技師正村慎三郎、審査官は農事試験場技師二瓶貞一と農林技師小林正一郎であった(兵庫県知事正四位勲三等白根竹介よりの賞状 昭和九年十月十四日)。同共進会へ出品した別の農具が名誉賞牌を受賞(「耕耘犁具」)。

昭和十一年(一九三六)、三月、博多築港記念大博覧会(三月二十五日―五月十三日)に、会場入口が犁先をかたどった「深見館」を設置し、深見式農機具を出陳する。この博覧会は昭和六年から博多港の水深修築工事に着手し、この年に浚渫土破による埋立と防波堤築設等が完成したのを記念して、福岡地先(現・中央区長浜)で開催されたもの。深見鉄工所は約一〇〇坪の平屋建の独立展示館「深見館」を設置し、展示品は動力農具の部に「深見式脱穀機」ほかヤンマー発動機を併設し、畜力農具の部に「深見式二段耕犁・作耕機・碎土機他灌漑設備ミニチュアパノラマを、鑄造品の部に「深見式鑄物犁先一式・梵鐘、鳥居、燈籠、燈籠などの美術鑄造品類を、家庭金物の部には深見式風呂釜、バケツ他家庭金物・建築用金具類一式を展示した。十一月、特許局主催の第四回特許局発明展覧会に二段犁(特許第一〇一〇六八号)と犁(実用新案登録第一七〇二七七号)を出品(特許局長官村瀬直養よりの証書 昭和十一年十一月十四日)。実用新案数件を備えた深見式二段犁はその優秀さ故に農家の圧倒的支持を得た(「沿革」)。十二月、平

一郎を平次郎と改名（改製原戸籍）。十二月七日、日本最初の二段耕犁の競犁会を箱崎にて開催。二段耕犁の推奨により畜力耕法の進歩に貢献した（『深見式最新式耕耘犁具』）。

昭和十二年（一九三七）九月、南満州鉄道株式会社主催の農機具実演展覽会に多くの農機具を出品（農機具実演展覽会長勲六等農学博士香村岱二よりの感謝状 昭和十二年九月二十三日）。十月二十三日応召。兵器部長として北支（中国北部）出兵（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。

昭和十五年（一九四〇）十一月二十二日、神奈川県にて開催された紀元二千六百年奉祝記念全国馬耕競技大会にて名誉受賞。

昭和十六年（一九四一）十月召集解除（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。

昭和十八年（一九四三）、金属回収令により銅像供出。

昭和十九年（一九四四）一月二十三日、再度召集され、特設警備大隊長となる（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。

昭和二十年（一九四五）五月、道路拡張改良工事のため工場の中央を道路が通ることになり、向側の農具陳列所を取り壊し、電気炉は福岡製鋼蓑島工場を買収して移動した（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。六月十九日、福岡大空襲により福岡市上土居町九番地（現・博多区店屋町四番地）にあった、深見鉄工所の会社および工場、そして住居をわずか二、三棟残して焼失（深見陽一「博多の町に火の雨がふる」『うわさ』一九九五年）。ただし明治町工場と蓑島工場は無事であった。焼け跡の道路より北側は福岡警察署北署となり、南側の地に事務所と工場の一部を設けて他の分工場とともに事業を続ける。終戦後は電力

制限により鋳鋼部蓑島工場を閉鎖する（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。菩提寺の妙行寺も本堂、書院、庫裡などが全焼した。総代や責任役員を歴任していたので妙行寺復興再建期成会の会長に就任。復興再建に尽力する（『深見家先祖聖衆位』）。九月、召集解除（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。十月、戦後の食糧自給において最も急務とされたのが農機具と肥料である。深見製作所の深見式両用型犁を製造する工場では全力で増産体制をとる。鋼を真つ赤に焼く者、木工にその技術をふるう者、できあがった製品を運ぶ者、一人として休む者はいなかったとのこと。工場では復員した兵隊が部厚い胸と逞しい腕で増産の中心となり、「国本号」や「新日号」などの両用型を作り上げていった（『西日本新聞』昭和二十年十月九日二頁）。

昭和二十一年（一九四六）十月十五日、佐賀県主催の全国農機具共進会にて出品した農具が金牌を受賞。

昭和二十二年（一九四七）四月十七日、熊本県主催の全国農機具共進会にて出品した農具が金牌を受賞。五月二十八日、大阪府主催の全国農業機械化展覽会にて出品した農具が金牌を受賞。

昭和二十六年（一九五一）十月、両用二段犁の発明が戦後わが国の産業振興に大いに貢献したとして昭和二十六年度発明賞を受賞（『沿革』）。

昭和三十二年（一九五七）十月、紫綬褒章を受ける。「褒賞の記」の全文を載せると、「深見平次郎 早くから犁の研究に専念し日夜苦心幾多の改良を重ねてよく両用二段犁その他これが一連の発明考案を完成して農業技術の発達に寄与し事績まことに著名である よって褒

賞条例により紫綬褒章を賜わって表彰せられた（朱字方印「内閣之印」） 昭和三十三年十月十二日 内閣総理大臣岸信介（朱字方印「内閣総理大臣之印」） 内閣総理大臣官房賞勲部長 吉田威雄（朱字方印「内閣総理大臣官房賞勲部長之印」） 第一〇八号。このころ、新しい博多駅が祇園町から現在地に移転する話が具体化してきたので、明治町工場を移転させて土居町工場といっしょに春日町に工場を建設することにした。博多駅移転につき地主代表として、太田清蔵、渡邊與三郎、戸嶋新一、内田栄一らとともに協力する。新博多駅は昭和三十八年（一九六三）十二月一日に開業した（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。

昭和三十三年（一九五八）四月、「深見興産株式会社」を創立。代表取締役会長となる。春日工場は次々と新しい農具を製作するが、大手法人に押され全国に広く渡った品物の代金の徴収も容易に出来ずに事業を閉鎖。私財を出して職員や工員に退職金を渡し、在庫品を分け与え、事業を始める者には応接して難なく整理を終え、深見興産の事業に専念することにした。また戦後は方々の教育界発展に尽力し、さらに郷友会の役員、修猷館剣道部後援会副会長などを歴任した（妙行寺から深見御母堂様宛手紙裏メモ）。

昭和四十年（一九六五）三月十六日に逝去。享年六十三歳。

●深見清太郎（大浜町一丁目）

大正元年（一九一二）十二月、「深見器械鑄物工場」（福岡市大浜町一丁目）を創立。工場敷地三三〇坪、事務員二名、技術員二名、技術

員一名、職工男二十二名。鉦山用諸機械一七〇匁一二〇〇〇円、鑄鉄管八〇匁八〇〇〇円の年産があり、市内及び若松、長崎等に供給した（『福岡市史』第二卷大正編）。

●深見陽一（十三代）

昭和二年（一九二七）七月二十二日生まれ。深見興産株式会社代表取締役社長、および趣味の西日本奇術クラブ会長をつとめる。

昭和三十三年（一九五八）四月、自社販売部があつた場所に冷泉ビルを建設し、農機具の製造販売からビル管理などの不動産賃貸業に転換する。

昭和三十七年（一九六二）七月九日、福岡銀行の勧告もあり、主務官庁に事業場閉鎖の旨届け出て、伝統ある農機具製造の業務を閉鎖する（原稿用箋「事業場閉鎖について」 昭和三十七年八月二十八日）。

昭和四十五年（一九七〇）深見ビルを建設する。

平成十六年（二〇〇四）八月六日に逝去。享年七十七歳。

●深見與次衛

昭和十二年（一九三七）九月、長崎県壱岐市にある壱岐大島神社の、奉獻建立された拝殿改築寄付者の円柱状芳名碑を鑄造。表面に陽刻銘「奉（社紋）献」「大島神社拝殿改築寄付芳名 昭和十二年八月吉日」とあり、周囲には六段にわたって寄付者芳名が陰刻されている。最下段に「鑄工 山鹿平九郎／村本與三郎／小田市太郎／深見與次衛／豊島義光／深見彌八郎／委員 吉田重次郎／委員長 豊島正教／改築工

事委員」とある（九州国立博物館望月規史氏よりご教示 二〇一八年）。

● 深見彌八郎

昭和六年（一九三二）八月、長崎県壱岐市にある壱岐大島神社の「青年會創立四十年記念鳥居」建設の世話人をつとめる。そのことは現地にある、表面に陽刻銘「大島神社」「青年會創立四十年記念鳥居建設碑」とある円柱形の青銅製銘碑の、四段にわけて印刻された氏名の「世話人」の欄に「深見彌八郎」とある。なおこの鳥居は金属供出されたとのこと（九州国立博物館望月規史氏よりご教示）。

昭和十二年（一九三七）九月、長崎県壱岐市にある壱岐大島神社の、拝殿改築寄付者の円柱状芳名碑を鑄造する。碑の最下段に山鹿平九郎、深見與次衛等とともに鑄工として記名されている（九州国立博物館望月規史氏よりご教示）。

● 深見嘉市

昭和六年（一九三二）八月、長崎県壱岐市にある壱岐大島神社の「青年會創立四十年記念鳥居」建設の世話人をつとめる。そのことは現地にある円柱形の青銅製銘碑に陰刻された氏名の最下欄の世話人の欄に記名されている。深見嘉市は青銅製鳥居鑄造にかかわった鑄物師深見彌八郎の一族と思われる（九州国立博物館望月規史氏よりご教示）。

● 深見モヨ

昭和六年（一九三二）八月、長崎県壱岐市にある壱岐大島神社の、

「青年會創立四十年記念鳥居」の建設費として金三円を寄付している。そのことは現地にある円柱形の青銅製銘碑に陰刻された氏名の欄に「金三円 深見モヨ」とある。深見モヨはその鑄造にかかわった鑄物師深見彌八郎の一族と思われる（九州国立博物館望月規史氏よりご教示）。

● 深見喜兵衛

昭和五十二年（一九七七）から四年間、博多人形師原田嘉平へ宛てた年賀状の住所は福岡市博多区冷泉町八一―一二 かもがねビルである（福岡市博物館『平成元年度収集収蔵品目録』七 八五頁、九二頁、一〇六頁、一二二頁 一九九二年）。

● 深見甚平

昭和五十四年（一九七九）の博多人形師原田嘉平宛年賀状の住所は、福岡市博多区冷泉町八一―一七だが、翌年の年賀状は福岡市東区大字下原に変わっている（福岡市博物館『平成元年度収集収蔵品目録』七 一〇三頁、一一六頁）。

● 深見達之（十四代）

昭和三十三年（一九五八）十一月二八日に生まれる。大学卒業後は深見興産株式会社に入社し、平成十五年（二〇〇三）に深見興産株式会社代表取締役社長に就任し今日に至る。

おわりに

この稿では上土居町深見家を中心に、『福岡縣碑誌 筑前之部』に掲載されている「深見興禎墓誌」を活用し、そして今日の深見家に伝来している『深見家先祖聖衆位』を参考に、本家と分家の人物を中心にした深見家の歴史をみてみた。

深見家は巻頭に記したように出自は武家である。そこで武家深見家を見てみると、「深見興禎墓誌」では藩主黒田忠之に殉死した深見重島の子長男治右衛門（三五郎）が禄五〇〇石を踏襲している。寛文四年（一六六四）頃に成立した「寛文官録」には明石四郎兵衛組御小姓に属し「三〇〇石 深見三五郎」とあり、延宝四年（一六七六）には長崎で末次平蔵の手代による密貿易が発覚したときには、馬廻の深見三五郎らが長崎へ派遣されている。元禄十三（一七〇〇）十四年（一七〇一）頃に出来た「福岡元禄分限帳」には「四〇〇石 深見五郎右衛門」とあり、宝永七年（一七一〇）頃につくられた、分限帳というよりも家臣の屋敷帳ともいわれている「宝永中第簿」に、五〇〇石の録をもらっていた深見五兵衛の邸宅が「堀端片原町南側東ヨリ」四軒目にあって、その広さは「表口式拾菴間 入式拾三間式尺五寸」と記されている。享保五年（一七二〇）に改訂された分限帳（題無し）では、深見五兵衛は五〇〇石五斗五升九合八勺に微増している。さらに安永九年（一七八〇）頃成立の「安永分限帳」では四七五石五升九合八勺と減り、文化十四年（一八一七）から文政期初等に成立したと推測される分限帳（題無し）では、「いなは丁 深見五郎右衛門（五兵衛改め）」が四七五石受領とある。なお黒田長溥が官兵衛を襲名したために「兵衛」

の名前は遠慮すべしということで、深見五兵衛改め「深見五郎右衛門」と名乗っている。そして天保十二年（一八四一）の「福岡分限帳」ではわずかに回復して四七五石五升九合八勺、安政二年（一八五五）に改められた「筑前黒田藩分限帳」では「いなは丁 深見五右衛門」が四七〇石、万延元年（一八六〇）調べの分限帳では「四七五石五升九合 深見五兵衛 因幡丁」とありほぼ不変の禄を食んでいる。明治初年（一八六八）七〇の「明治初年福岡藩士分限帳」には「忠之四百七拾五石五升九合八勺 一ノ銃士 因幡丁 深見寛」と「長知御切米二十二石六人扶持 同 深見久」とある。なお幕末に兵制が西洋化されて、馬廻組は一ノ銃士、無足組は二ノ銃士、城代組は三ノ銃士と改編されている（福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』海鳥社一九九九年）。これらにより馬廻りをつとめた武家深見家は明治維新まで続いており、その屋敷は福岡因幡町（今の福岡市中央区天神コアあたり）にあったことがわかる（「深見平次郎君」「舊友會」）。このように深見家は武家と分家した町家の両方を知ることができる数少ない事例の家である。

この稿作成にあたっては、深見実枝子様および深見興産株式会社取締役社長深見達様のご協力をいただきました。また、福岡教育大学名誉教授遠藤喜代志氏および九州国立博物館望月規史氏よりのご教示、そして福岡市博物館学芸課および、同館市史編さん室のご協力も得ました。記して深謝申し上げます。

（たなべ たかお…人間文化研究所 客員研究員）

博多鑄物師深見家

田 鍋 隆 男

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第三十一号 二〇二〇年